

タリ、ユレフ應永ノ役ト云フ。

(二六) 鎌倉管領ノ創置及其滅亡ヲ記スヘシ

尊氏府ヲ室町ニ開クヤ、關東ノ士人其己ニ服セザル者アルヲ恐レ、次子基氏ヲ以テ、鎌倉管領トナシテ東國ヲ鎮セシメ、兼テ室町幕府ノ藩屏タラシメタリシガ、基氏ノ孫滿兼ニ至リテハ、其兵勢優ニ室町ニ超エ、遂ニ大内義弘等ト室町ヲ謀ルニ至リシガ、滿兼未タ發セサルニ、義弘先ツ敗レケレハ事終ニ成ラズシテ止ミス、サテ滿兼卒シテ子持氏繼キテ管領タリ、持氏嘗テ將軍義持ノ嗣子義量ノ後ヲ承ケンコトヲ望ミシニ、義量薨シテ義持ノ弟僧義圓、還俗シテ名ヲ義教ト改メ、尋テ將軍トナリシカバ、持氏不滿ニ堪エス、我豈還俗將軍ニ屈センヤ、ト言ヒテ屢々幕府ノ命ニ叛ケリ、

執事上杉憲實深ク憂ヘテ、屢之ヲ諫メシガ、持氏少シモ用キザルノミナラズ、遂ニ之ヲ殺サントシケレバ、憲實事情ヲ京師ニ報セリ、義教即チ大ニ怒リテ持氏ヲ殺セリ、基氏管領タリシヨリ是ニ至ルマテ四代ニシテ、足利氏ノ鎌倉ニ管領タルコトヲ廢セラレ、上杉氏代リテ管領職ニ當レリ。

(二五) 嘉吉ノ變トハ如何

將軍義教、前代ヨリ制シ難キ鎌倉ナル足利氏ヲ滅シ、南朝ノ遺臣ノ亂ヲ所々ニ起シシヲモ討チ平ゲ、具強暴ナリシ、南都、北嶺ヲサヘ抑ヘケレバ、是ヨリ其武威ニ誇リテ、頗ル諸將ヲ輕侮セリ、殊ニ赤松滿祐ヲ忌ミテ、其一族ナル赤松貞村ヲ愛シ、滿祐ノ領地ヲサヘ、割キテ以テ之ニ與ヘントセシカバ、滿祐大ニコレヲ恨

ミ、事ニ托シテ義教ヲ其邸ニ招キ、遂ニ之ヲ弑セリ、是ニ於テ細川持之、山名持豊等討チテ滿祐ヲ誅セリ、是ヲ嘉吉ノ變ト云フ。

(二六) 應仁ノ亂ノ顛末及此亂ニヨリテ生ゼシ

結果ヲ記セ

(原因) 始メ畠山持國、其族政長ヲ養ヒテ子トセシガ、其卒スルニ及ビテ政長、持國ノ實子ナル義就ト其家督ヲ爭ヒ、劇シキ戰爭アリシニ、當時ノ管領細川勝元、政長ヲ助ケテ遂ニ其志ヲ得シメタリ、又斯波氏ニテモ義敏、義廉、家督ヲ爭ヒシガ、勝元、義敏ヲ助ケテ斯波氏ヲ繼カシメタリ、是ヨリ先、將軍義政子ナシ、弟義視ヲ立テテ嗣トナシ、誓ヒテ曰ク、以後若シ男ヲ得バ、必ず以テ僧トナスヘシト、此頃ニ至リテ夫人富子義尙ヲ生メリ、然レトモ僧トナ

スニ忍ビス、密ニコレヲ山名持豊ニ托シ、以テ嗣タラシメントス、持豊嘗テ其女ヲ勝元ノ妻トシ、其子ヲ彼ガ養子トセシガ、勝元實子政元ヲ生ミケレバ、先キニ持豊ヨリ貰ヒケル養子ヲ退ケタリ、是ヲ以テ持豊、勝元ト善カラズ、即チ夫人ノ托ヲ諾シ、勝元ニ代リテ己レ管領タランコトヲ望メリ、是ニ於テ、義廉、義就ヲ己ガ黨トナシ、以テ勝元ト頡頏セントセリ、持豊後薙髮シテ宗全ト云フ。

(端緒) 義就、政長相爭フテ決セス、遂ニ互ニ兵ヲ集メケレバ、將軍義政、私兵ヲ以テ輸贏ヲ決セシメ、諸將ノ相佐クルヲ禁ジタリ、然ルニ宗全密ニ義就ヲ援ケテ、政長ヲ破ラシム。

(戰況) 政長ノ敗スルヤ、勝元ノコレヲ佐ケザルヲ笑フ、是ニ於テ勝元兵ヲ集ムルコト十六萬、陣ヲ京ノ東ニ布ケリ、宗全マタ十一

萬餘人ノ兵ヲ集メテ京ノ西ニ陣セリ、爾來戰爭十一年、京師ノ市街概テ兵火ニ罹ラザルハナク、禁裡仙洞モマタ戰爭ノ爲メニ暴サレヌルニ至レリ、此戰爭中勝元、義政ヲ廢シテ義視ヲ將軍ニセントスト、流言スルモノアリケレバ、義視京都ヲ逃ケ出セリ、宗全乃チ迎ヘテ主トナセリ。

(結末)此戰爭何時カ、ヨク終ヲ告クルヲ知ラザリシガ、宗全、勝元相尋キテ死シケレバ、其後モナホ陣ヲ對セリトハ云ヘ、諸將漸ク國ニ就キ、結ヲ告ケスシテ、事止ムニ至リヌ。

(結果)幕府ノ威力ハ、京師ノ衰微セルガ如クニ衰微シ、諸國ニテハ互ニ黨ヲ立テ、怨ミヲ拂ヒ、強ハ弱ヲ併セ、大ハ小ヲ吞ミ、戰亂日日絶ユルコトナカリキ、殊ニ御傷ハシキ衰微ヲ呈シタルハ、威令六合ニ洽カルベキ、皇室ノ御有様ナリキ。

(三二) 應仁ノ亂後ニ於ケル皇室衰微ノ御有様ヲ

記スベシ

應仁ノ亂後ハ、諸國全ク亂レテ、守護地頭ハ、皆其貢賦ヲ獻ズル者ナク、府庫全ク空乏シテ、御即位ノ御式サハ行ハセ給フコト能ハザリシ有様ナリキ、今實例ニヨリテ之ヲ云ハ、應仁ノ亂中ニ御花園上皇崩シ給ヒシモ、葬儀ノ費用ニ御事ヲ欠カセラレ、四十餘日ノ間、宮中ニ置カセ給ヒキ、後柏原天皇ノ皇位ヲ承ケサセ給フニ當リテハ、即位ノ大禮ヲ行ハセ給フ御費用ナク、本願寺ノ僧光兼ヲシテ、金壹萬兩ヲ獻ラシメ、纔ニ其儀式ヲ濟サセ給ヒキ、次ノ後奈良天皇ノ御即位ノ時ニハ、大内義隆獻金シ、又次ノ正親町天皇ノ御即位ノ時ニハ、毛利元就獻金シテ此御大禮ヲ行ハセ

給フノ有様ナリキ、サレバ日常ノ供御ニモ、御事ヲ欠カセ給ヒシモノ多カルヘク、記シ奉ルモ畏レ多キコトドモナリ、實ニ淺マシキ世ノ中ナリシナリ。

(三) 義政及義尙ノ人トナリヲ記スヘシ

義政情弱ニシテ、將士ヲ制スルノ材能ナク、遂ニ應仁ノ大亂ヲ惹キ起スニ至リシモ、其性奢侈ヲ好ミテ、別業ヲ東山ニ起シ、柱壁ニ銀箔ヲ施シ、以テ義滿ノ金閣寺ニ擬シ、又東求堂ヲ造リテ、茗讌古器ヲ翫ビ、優々生ヲ送リ、世ノ喪亂ヲ以テ、毫モ意ニ介セザルモノ、如クナリキ、嘗テ凶荒四方ニ起リ、盜賊處々ニ出沒シ、餓莩野ニ滿チケルガ、義政敢テ意トナサズ、タゞ己ガ驕奢ニノミ耽リケレバ、御花園天皇深く憂ヘサセラレテ御詩ヲ賜ハリ、コレ

ヲ規戒セラレタリキ、曰ク

殘民爭採首陽薇、處々閉爐鎖竹扉、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥。

ト、義政マタ國用足ラザルニ至レルヲ以テ、明ニ哀願シテ錢ヲ乞フコト三回、終ニ錢十萬貫ヲ賜ハラバ、我國用幸ニ足ラントマデ、哀求スルニ至レルトハ、何等ノ醜漢ゾ、國體ヲ辱シムル大罪決シテ恕スベキニアラザルナリ、然レドモ其子義尙ハ、聰明ニシテ學ヲ好ミ、又武ヲ嗜ミ、國家ノ擾亂ヲ定メントノ志アリシガ、不幸ニシテ早世シタリキ、蓋シ天既ニ足利氏ヲ棄テタルナリ。

(三三) 足利氏ノ德政トハ如何

足利政府ノ以テ德政ト稱セシモノ、其意味最モ妙ナリ、乃チ一切

ノ負債ヲ償ハザルノ法令コレナリ、中古ノ頃此法令ヲ出シタルコトナキニアラザリシカドモ、ソハ租税ノ延滞セシモノナドヲ免除シ、或ハ凶年ニ際シテ、租税ノ義務ヲ盡ス能ハザル者ヲ宥免シタリキ處ノ、仁政ノ一ナリキ、然ルニ足利氏ニ至リテハ、大ニ其意義ヲ異ニシテ、暴政ノ一トハナレリ、乃チ足利氏ニ至リテ國帑空乏シ、費用支ヘザリケレバ、財ヲ民ニ借り、負債山積、遂ニ償ヒ難キニ至ルトキハ、所謂德政ノ令ヲ發シテ、辨償ノ義務ヲ解除セリ、此德政令、義政將軍ノ時代ニ於テハ、十三回ノ多キニ及ベリト云フ、暴モマタ極マレルカナ、サレハ當時ノ貸借證書ニ於テハ、假令德政ノ御布令アリト雖モ、必ズ辨償スベキ旨ヲ記入スルモノアリシト云フ、如何ニ財政紊亂セシコト察スベキナリ。

(二五) 室町時代ノ文學如何

北條氏ノ末年ヨリ、文學漸ク衰へ、足利氏ニ至リテハ殆ト絶滅セントスル有様ニテ、文筆ニ堪フルモノハ、僅カニ五山ノ僧侶ニ過キザリキ、此他ニアリテハ足利學校、金澤文庫等アリタレドモ、微々トシテ僅カニ文學ノ脈絡ヲ通シタルニ過キス、サレハ一般人民ハ如何ニセシカヲ尋ヌルニ、僧侶ノ私塾ニ於テ、齊シクコレヲ傳ヘタリ、サレハ此頃ヨリ始メテ學ニ就クヲ、坊入トハ云ヒタリトゾ。

(二六) 室町時代ニ於ケル美術如何

文學ハ頗ル衰ヘタレトモ、金閣、銀閣等ノ建築アリ、マタ世ノ奢侈ニ從フテ、其進歩ヲ促サレ、義政時代ニ於テハ頗ル發達シ、繪

書ニハ如拙、周元、明兆アリ、マタ雪舟アリ、光信アリ、元信アリ、皆有名ナル畫工ニシテ、今ニ至ルマデ多ク其比ヲ見ザル所トナス、彫刻ニハ明珍家ノ宗安頗ル著ヘレ、刀劍ノ裝飾品ニハ後藤祐乘最モ名高カリキ、陶工ニハ祥瑞アリ、明ニ往キテ磁器ヲ製スルノ法ヲ學ヒ、其技、妙處ニ至リ、還リテコレヲ肥前唐津等ノ工人ニ傳フ、蒔繪ニモ名匠多ク出テ、明國ヨリ來リテ業ヲ受ケシモノアリキ、マタ堆朱、堆黒ナトハ、義政ノ時代ヨリ始マレリト云フ、義政茶儀ニ耽リシ爲メ、此等ノ器具製造ノ術ハ、特ニ進歩シタリキ。

(二六) 東山時代ノ風俗如何

義政、意ヲ國家ニ用ヒズ、日夕公卿ヲ會シテ、遊樂ヲ事トシ、僧

珠光等ヲ親近シテ、頻リニ茶會ニ耽リ、殊ニ支那ノ古器古畫ヲ愛玩シケレバ、諸國ノ大小名ハ勿論、農夫、商人ニイタルマテ、風流ヲ好ミ、奢侈ヲ競ヒ、通常ノ家屋ニモ、上流社會ニ於テハ、唐破風ヲ附シ、檜皮ヲ以テ、其屋根ヲ葺クコト、ナレリ、下民ノ屋根ニハ藁葺、萱葺、及ビとりふきトテ、板ヲ列ベテ、其上ニ石或ハ木片ヲ載セタルモノアリキト云フ、是ヨリ先キニ涅槃、畫眉ノ風尤モ盛ニシテ、白齒者ハ最モ卑シキ者ト認メラレタリ、又調理、配膳ノ法、大ニ備ハリ、禮文大ニ進ミタリキ。

(二七) 北條氏ノ崛起ヲ記スベシ

北條長氏ハ早雲ト稱ス、平貞盛ノ遠孫、伊勢氏ノ裔ナリ、人トナリ、聰毅明決ニシテ大志ヲ懷キ、財ヲ散シテ豪傑ト結ビ、以テ天下

ヲ圖ラント欲ス、先ツ今川氏ニ客將トシテ、茶々丸ヲ襲殺シ、尋
キテ北條ニ築キ、伊豆ヲ横領シ、又謀略ヲ以テ小田原ヲ取り、相
摸ヲ略ス、其子氏綱モ亦善ク戰ヒ、孫氏康モ亦タ英略アリ、遂ニ
古河ナル足利氏及鎌倉管領ナル上杉氏ヲ滅シ、以テ威ヲ關東八州
ニ振フニ至レリ。

(二六) 河中島ノ戰ヲ記スヘシ

河中島ノ戰ハ、上杉謙信ト、武田信玄トノ戰ニシテ、前後五回ノ
快戰ニ二十ヶ年ヲ費セリ、此戰ヤ固ト信玄ノ村上義清ヲ逐ヒ、河
中島四郡ノ地ヲ略セルニヨルト雖モ、謙信ノ威ヲ東國ニ張ランニ
ハ、先ツ信玄ヲ除カザルベカラザルニ基ケルモノタルコト、疑ヲ
容レザルナリ、サテ謙信ハ、モト長尾氏ニシテ、山内家ノ家宰ナ

リシガ、謙信ノ父爲景ノ時ニ至リテ越後ニ獨立シ、勇名ヲ四隣ニ
輝カセリ、子景虎勇悍ニシテ、膽略ニ富メリ、乃チ謙信コレナリ、
山内憲政、北條氏康ノ爲メニ破ラレケレバ、謙信ニ投シテ上杉ノ
姓ト、管領ノ職トヲコレニ讓レリ、是ニ於テ謙信、將軍義輝ニ謁
シテ、管領職ヲ許サレ、且將軍ノ諱ノ一字ヲ賜ハリテ、名ヲ輝虎
ト改メ、威風凜乎トシテ、小田原城ニ迫レリ、流石ノ氏康モ城ヲ
出ツルコト能ハズ、タゞ使ヲ甲斐ニ送リテ信玄ノ救ヲ求メタリ、
信玄ハ甲斐源氏ノ後裔ニシテ、深ク兵機ニ通ジ、謀略ニ富メリ、
コレハ村上義清ハ、之ニ敵スル能ハスシテ謙信ニ投セルナリ、是
ニ於テカ河中島ノ戰爭トハナレリ、兩將共ニ智謀ニ富ミケレバ、其
戰頗ル奇正ノ變ヲ極メテ、範ヲ後世ニ遺セルモノ多シ、然レトモ
兩將相尋キテ病没シケレハ、此戰モ未タ結局ヲ見ズシテ事遂ニ息

ミタリ。

(二九) 嚴島ノ戰ヲ記スベシ

天文二十年、陶晴賢其主大内義隆ヲ弑ス、義隆死スルニ臨ミ、書ヲ以テ毛利元就ニ囑シテ曰ク、吾レ不幸ニシテ、賊臣ノ爲ニ弑セラル、恨ヲ吞ミテ地ニ入りヌ、卿ニ非レバ、誰カ能ク我仇ヲ復セント、元就書ヲ見テ泣テ曰ク、吾レ大貳ノ恩眷ヲ受ケシヤ大ナリ、囑スルトコロナシト雖モ猶ホ爲ニ仇ヲ復セザルベカラズ、況ヤ是アルヲヤト、依リテ諸將ヲ會シテ、晴賢ヲ討スルノ謀ヲ議ス、小早川隆景曰ク、宜シク之ヲ天子ニ請ヒ、大義ニヨリテ之ヲ討ツベシ、然ラバ則チ人心ノ向フ所、克タザルコトナケント、元就曰ク善シト、乃チ上書シテ晴賢ヲ討ツノ詔ヲ請フ、制可セラル、元

就感喜、城ヲ嚴島ニ築ク、諸將皆其不可ヲ諫ム、元就聽カス、城成レリ、兵數百ヲ以テ之ヲ守ラシム、既ニシテ元就聲言ス、吾レ諸將ノ言ヲ聽カザリシヲ悔ユ、嚴島ノ地形、守リ難ク、援ヒ難シ、若シ敵ノ有トナラバ、諸城從テ陥ラン、吾計、此ヨリ失シタルハナシト、晴賢聞キテ大ニ喜ビ、騎卒二萬、戰艦千餘艘ヲ將井テ、嚴島ヲ攻ム、元就、暗夜大雨風ニ乗シ舟師ヲ帥井テ之ヲ襲フ、賊軍惶遽、自ラ相刺シ、遂ニ大ニ潰ユ、晴賢、咄嗟シ以テ走ル者ヲ遇ムレドモ、過マルモノナク、皆舟ヲ争ヒテ遁レ、溺死スル者數千人、晴賢肥大、行歩ニ便ナラズ、從者扶掖シテ海濱ニ至リシガ、舟ノ以テ乗ルベキナシ、乃チ遂ニ自殺ス、之ヲ嚴島ノ戰ト云フ、元就ノ威名是ヨリ更ニ中國ニ振フ。

(二吉) 足利氏ノ末年群雄割據ノ形勢如何

應仁ノ亂後、武人各地方ニ割據シ、日夜戰爭ノ絶ユル間トテハ、アラザリシガ、弱ハ強ニ併セラレ、小ハ大ニ滅サレ、永祿年中、乃チ正親町天皇ノ御代ノ頃ニハ、左ノ如キ形勢ヲナセリ

畿内及其近傍
織田信長(美濃、尾張、及和泉、攝津ノ一部分)北畠氏(伊賀、伊勢、志摩)松永氏(大和、河内ノ一部分)淺井氏(近江)筒井氏(大和ノ一部分)三好氏(和泉、攝津ノ一部分)畠山氏(紀伊、河内、和泉、大和ノ一部分)

東海及東山

武田今川二氏(甲斐、信濃、駿河、飛驒)北條氏(伊豆、相模、下

總及上野ノ一部分)里見氏(安房、上總)佐竹氏(常陸ノ一部分)小田、宇都宮諸氏(常陸、下野)南部、伊達、相馬、蘆名、最上ノ諸氏(奥羽)

北陸

上杉謙信(越後、越中、佐渡、上野及武藏ノ一部分)朝倉氏(越前)本願寺門徒(加賀、能登ノ一部分)

山陰及山陽

毛利氏(周防、長門、安藝、備後、備中、伯耆、出雲、石見、隱岐)山名氏(但馬、因幡)波多野氏、一色氏(丹波)宇喜多氏(備前)浦上氏(美作)赤松氏、別所氏(播磨)

四國

細川、三好、長曾我部、河野ノ諸氏

九州

大友氏(豊前、豊後、筑前、肥後)島津氏(薩摩、大隅)伊東氏(日向)龍造寺氏(筑後)松浦氏、有馬氏(肥前)宗氏(壹岐、對馬)

(二七) 室町時代ニ於ケル宗門ノ亂如何

叡山、奈良ノ諸寺、古ノ如ク兇暴ナラザリシモ、一向宗ノ門徒、諸國ニ蔓延シテ、暴威ヲ逞クセリ、一向宗ノ開祖、親鸞ヨリ七世ノ孫、蓮如上人、一世ノ才辨ヲ振ヒ、巧ニ說法セシカバ、之ニ歸依スル者多カリシガ、御土御門天皇ノ御代ニ、延曆寺ノ爲ニ惡マレ、其寺ノ京都ニアリシモノヲ毀タレ、其身ハ逐ハレキ、サレハ蓮如ハ、我宗門ヲ擴張センニハ、須ラク兵力ヲ借ラサルベカラズトナシ、天下無賴ノ徒ヲ集メシカバ、勢漸ク大ニ、遂ニ一向宗ノ一揆

ヲ見ルニ至レリ、此ノ一揆ハ、越前、加賀等ノ北國ヨリ、近江、三河、伊勢等ニ及ホシ、畿内ニモ亦盛ニシテ、石山城ノ一揆ノ如キハ、甚タ猖獗ヲ極メタリシガ、僧日蓮ノ開キケル日蓮宗ノ一揆モ、此頃マタ盛ナリキ。

(二七) 鐵砲ノ傳來ヲ記スベシ

我カ東山時代ヨリ、歐洲諸國ニ於テハ、航海ノ術大ニ開ケ、西ニハ亞米利加洲ヲ發見シ、東ニハ亞非利加洲ヲ廻リテ、印度及埃西利亞諸島ニ來航シタリシガ、後奈良天皇ノ天文年中、葡萄牙ノ商艦、大隅ノ種子ケ島ニ來レリ、時ニ島主、天草時堯、其船中ニアリ、鐵砲ヲ請ヒ受ケタリ、是レ我國鐵砲アルノ始メナリ。

(二五) 耶蘇教ノ傳來如何

歐洲諸國、航海ノ術開クルニ至リテ、葡萄牙人及西班牙人、我西邊ニ來リ、漸ク耶蘇教ヲ布キケルガ、大友義鎮等コレヲ信ジケルヨリ、信徒次第ニ増加シ、遂ニハ京師ニ入り來リヌ。

第十章 織田氏及豐臣氏時代

(二六) 織田信長ノ祖先及其少時ノ行爲ヲ記セ

織田信長ハ尾張ノ人ナリ、小字吉法師、姓ハ平氏、備後守信秀ノ二男ナリ、母ハ六角高頼ノ女、其先平重盛ヨリ出テタリ、重盛ノ子、資盛、資盛ノ子、親眞、越前織田莊ノ神職某ノ養子トナリ、

始メテ織田氏ヲ冒ス、親眞ヨリ後、十五世ヲ經テ、敏定アリ、其孫信秀ハ乃チ信長ノ父ナリ、信秀初メ名護屋城ヲ築キ、信長ヲシテ之ニ居ラシム、信長幼ヨリ、倜儻ニシテ大志アリ、細節ニ拘ラズ、勇ニシテ斷ニ富ミ、尤モ武事ヲ好メリ、其被服、奇偉ヲ喜ビ、常ニ大刀ヲ帶ブ、其市街ヲ行クヤ、傍ラ人ナキガ如シ、年甫メテ十三、師ニ就キテ書ヲ學ブニ、放縱兇暴、敢テ務トナサズ、常ニ武術ヲ練習シ、射馭及ビ擊劔ヲ學ビ、事ヲ放鷹、毆魚ニ托シテ、以テ諸將士ノ剛弱ヲ試ム、十六歳ノ時、始メテ兵ヲ率キテ、參河ニ抵リ、火ヲ吉良、大濱ニ縱チテ歸ル、十八歳ノ時信秀卒ス、信長及ビ弟信行、喪ヲ送ル、信長行裝、例ニヨリテ奇異ナリ、牌前ニ進ムヤ、突然香ヲ握リテ之ヲ抛チマタ顧ミズ、是ヨリ日夜更ニ武技ヲ嗜ミ、新ニ三間柄、及ビ三間半柄ノ長鎗ヲ作り、夏月毎ニ

水練ヲ習フ、自ラ上總介ト稱シ、弟信行ヲシテ、末盛城ヲ守ラシム、傳平手清秀、深ク信長ノ行爲ヲ難シ、屢々之ヲ諫メシカド聽カザリケレバ、諫言五事ヲ書シテ、遂ニ自殺セリ、信長見テ大ニ驚キ、自ラ咎ヲ引キ、屏居シテ出デズ、爲ニ一寺ヲ建テ、佛事ヲ營メリ、爾來過ヲ改メ、行ヲ勵マシ、窃ニ天下ヲ經綸セントノ志ヲ養ヘリ。

(二五) 桶峽ノ戰ヲ記セ

永祿三年、今川義元、駿河ヲ發シ、四萬餘人ヲ率キテ、遠江、三河ノ二國ヲ略シ、尾張國愛智郡沓掛ノ里ニ到リ、糧ヲ大高城ニ納ル、尾張ノ諸城風ヲ望ミテ、多ク之ニ降ル、信長聞キテ迎撃セントス、傳林通勝曰ク、彼ハ衆、我ハ寡、爭テカヨク之ニ當ランヤ、

城ヲ守リテ出デザルニ如カズト、信長曰ク、先ズレバ則チ人ヲ制シ、後ルレバ則チ人ニ制セラル、コレ古今ノ常例ナリ、我豈ニ慮セシヤト、酒ヲ諸將士ト酌ミ、自ラ舞ヒ且諺フテ曰ク

人生五十年、乃如夢與幻、有生斯有死、壯士將何恨、

ト、則チ袂ヲ振ヒテ起ツ、左右屬スル者、僅ニ八九人、路ニ熱田社ヲ經、書ヲ納レテ勝ヲ祈ル、時ニ兵卒ノ來リ集ルモノ、稍一千人ヲ得タリ、時ニ義元桶峽ニアリ、勝ニ誇リテ自ラ驕ル、偶々大雨盆ヲ覆ス、信長曰ク時ナルカナト、俄然營ヲ斫テ入ル、義元狼狽ス、服部小平太、望ミ見テ之ヲ斃ス、義元佩力ヲ把リ、其膝ヲ斫リテ之ヲ倒ス、毛利秀高義元ヲ刺シ、其首ヲ斬リテ出ツ、今川氏ノ軍大ニ潰ユ、マタ修ムカラズ、信長追撃シテ首ヲ斬ルコト、二千五百餘級乃チ熱田ニ賽シテ、凱旋ス、是ヨリ威名大ニ天下ニ

聞ユ。

(二六) 信長ノ上京ヲ記スベシ

信長ノ威名四方ニ傳ハルヤ、正親町天皇ハ、熱田神宮ノ奉幣使ニ
密詔ヲ齎ラシ、京都ヲ鎮メテ、叡慮ヲ安ンジ奉レト傳ヘシメ給ヒ
キ、信長謹ミテ詔ヲ奉ジ、マヅ三河ノ徳川家康ト婚ヲ結ビテ、武
田、北條等ノ強敵ニ備ヘシメ、己ハ諸將ト共ニ西上ノ準備ヲナセ
リ、時ニ將軍足利義昭モ、マタ來リテ松永征伐ノ事ヲ頼ミシカバ
信長乃チ義昭ヲ奉ジ、先ツ近江ニ出テ、六角氏ヲ滅ボシ、京都ニ
上リテ三好、松永等ヲ下シ、義昭ヲ將軍トナシヌ、斯クテ古代ノ
儀式ニヨリテ、皇室ヲ造營シテ供御ヲ奉シ、二條ノ第ヲ修メテ義
昭ヲ居ラシメ、公卿ノ流落セルヲ招集シ、采地ヲ失ヒシ者ニ贖ヒ

還シ、部將木下秀吉ヲシテ、禁裡ヲ守護セシム、是ニ於テカ、久
シク荒レ果テタル京都モ、稍々舊觀ニ復セントセリ。

(二七) 信長ノ叡山ヲ燒キシコトヲ記スベシ

信長、朝倉淺井兩氏ト兵ヲ構フルヤ、延曆寺ノ僧徒等コレニ黨シテ
數々信長ヲ苦シム、信長コレニ中立ヲ説ケトモ、彼レコレヲ聞カ
ス、信長コレニ云フテ曰ク、若シ從ハザレハ山門ヲ燒カント、僧
徒等頑トシテ改メズ、既ニシテ信長、朝倉、淺井兩氏ト和ス、是
ニ於テカ、火ヲ山門ニ放ツ、僧徒等逃ケ走ラントス、乃チ捕ヘテ
之レヲ殲ス。

(二八) 本能寺ノ變ヲ記スベシ

羽柴秀吉、西征シテ備中ニアリ、高松城ヲ圍ミ攻ム、時ニ毛利氏、大兵ヲ率井テ、來リ救フ、秀吉乃チ援ヲ信長ニ請フ、信長安土城ヲ發シテ、京師ニ入り、本能寺ニ舘ス、長子信忠マタ從ヒテ發シ、妙覺寺ニ舘ス、時ニ部將、明智光秀、信長ノ命ヲ受ケテ先發セシガ、其領丹波ノ龜山城ニアリテ兵ヲ召シ、直ニ引キ還シテ、信長ノ舘ヲ襲フ、信長近侍ノ士ヲ督シ、奮鬪セシガ、其終ニ勝ツベカラザルヲ察シ、火ヲ放チテ自殺ス、信忠變ヲ聞クヤ、直ニ馳セテコレニ赴キシガ、途ニテ父ノ弒セラル、ヲ聞キ、火ヲ放テ自盡ス
實ニ天正十年六月二日ナリ。

(二五) 信長ノ短所トスル所如何

信長人ヲ知り、ヨクコレヲ登庸スト雖モ、マタ愛憎多ク、意ニ滿

タザル所アルトキハ、面罵シラ省ミザルノ癖アリ、此癖遂ニ光秀ノ怨ヲ買ヒ、大業未タ成ラスシテ、遂ニ其身ヲ殺シ、コソ口惜ケレ。

(二六) 秀吉毛利氏ト和シタル顛末ヲ問フ

明智光秀、織田信長ヲ弒スルヤ、時ニ羽柴秀吉ハ播磨ニアリテ毛利輝元ト相持セシガ、京師ノ凶報至リシカバ、徐ニ師ヲ廻サントスルニ當リテ、輝元使ヲ遣ハシテ和ヲ乞フ、秀吉乃チ使者ニ謂テ曰ク、光秀逆ヲナシ、右府公弒セラレ、國大ニ亂ル、我今馳セ還リテ、賊ヲ討ジ、亂ヲ靖メントス、汝が主ナホ且約ヲ守ルヤ、否、若シ我ヲ撃タント欲セハ今日ヨリヨキハナカルベシ、汝歸リテ夙ク之ヲ告ゲヨト、使者歸リ報ズ、輝元將士ヲ會シテ之ヲ議セ

シム、小早川隆盛、進ンテ曰ク、秀吉、智略人ニ超エ、必ズヨク
亂ヲ平ゲ、天下ニ覇タラン、今約ニ負キテ、怨ヲ結ブコトアラザ、
他日毛利氏ノ滅亡、測リ知ルベカラザルモノアラン、且ツ彼レ變
ヲ聞キテ諱マズ、明ニ之ヲ我ニ告グ、其志ノ偉ナル、尋常匹夫ノ
ヨクナシ得ル所ニアラズ、宜シク約ヲ踏ミテ、師ヲ班スニ如カズ
ト、乃チ使者ヲ遣ハシテ質ヲ送り、喪ヲ吊ヒ、且ツ盟ヲ結ビテ、
役ヲ佐ケント請フ、乃チ騎一隊ヲ借り、高松ヲ發シテ、京師ニ還
ル。

(二八) 山崎ノ戰ヲ記スベシ

天正十年、明智光秀、信長父子ヲ弑シ、洛中ヲ鎮メ、直ニ信長ノ
居城安土ニ入リシカバ、衆心疑懼シテ、ナサントコロヲ知ラズ、

信長ノ次子、信雄、三子信孝ヲ始メトシ、宿將等、皆討賊ノ機ヲ
失シ、未ター一人ノ之ヲ決行スルモノナカリキ、時ニ秀吉毛利氏ト
和シ兵ヲ引キテ還ルヤ、衆皆大ニ喜ビ、尼ヶ崎ニ會シテ戰ヲ議ス、
此戰高山友祥ヲ先鋒トナシ、諸將次ヲ以テ進ム、光秀之ヲ聞クヤ、
其從子光春ヲシテ、安土ヲ守ラシメ、自ラ洞嶺ニ至リ、遂ニ進
テ淀城ニ入ル、秀吉使ヲ遣ハシ、光秀ニ告ケテ曰ク、明日山崎ニ
會戰セント、光秀之ヲ諾ス、乃チ騎兵一萬五千ヲ率井、雨ヲ冒シ
テ天王山ニ上リ、南ニ臨ンテ陣ス、秀吉全軍ヲ率井、コレニ對シ
テ陣セシガ、堀秀政、堀尾吉晴等ヲ顧ミテ曰ク、今日ノ勝敗ハ天
王山ニアリ、彼ヲシテ先ツ得セシムルナカレト、秀政、吉晴等
奮進先ツコレヲ取ル、既ニシテ光秀ノ軍大ニ敗レ、遂ニ遁レテ青
龍寺城ニ入ル、秀吉城ヲ圍ムコト數重、城兵稍々散亡シ、餘ス所

僅カニ百人、光秀益々惶怖シ、即夜十餘騎ト、園ヲ潰シテ北出シ、馳セテ坂本ニ向ヒ、小栗栖ニ至ル、土兵四方ニ起リ、遂ニ光秀ヲ殺ス、光秀、信長ヲ弑シテヨリ日ヲ經ルコト、僅ニ十三日、是ヲ山崎ノ戰ト云フ。

(二八二) 秀吉ノ生立ヲ記スベシ

豊臣秀吉、始メ自ラ木下ト稱セシガ、中頃羽柴ト改メ、後ニ豊臣ノ姓ヲ賜ハリキ、モト尾張國、愛知郡、中村ノ農彌右衛門ノ子ナリ、彌右衛門早ク死シケレバ、母同村ノ竹阿彌ニ再嫁シタリキ、サレバ秀吉モ竹阿彌ニ養ハレヌ、秀吉十六歳ノ時、今川義元ノ家臣、松下之綱ニ仕ヘシガ、二十三歳ニ至リ、木下藤吉ト名乗リテ信長ノ奴トナレリ、藤吉機敏ニシテ、ヨク信長ノ意ニ合ヒシカバ、

次第ニ立身シテ、一方ノ將ニ擢テラレ、遂ニ京師警衛ノ重職ニ當ルニ至レリ、斯クテ逆賊光秀ヲ、山崎ノ一戰ニ滅シケレハ、威名遽ニ振フニ至レリ。

(二八三) 賤ヶ岳ノ顛末ヲ記スベシ

(原因) 山崎ノ戰爭後、秀吉ノ威名獨リ盛ナリケレバ、柴田勝家、瀧川一益等、信長ノ第三子、信孝ト謀リテ、秀吉ヲ伐タントス。(事實) 秀吉此隱謀ヲ知ルヤ、直ニ信孝ヲ岐阜ニ攻ム、勝家、一益兵ヲ起シテ、信孝ニ聲援ス、信長ノ第二子、信雄ハ時ニ秀吉ニ黨シケレバ、秀吉コレヲシテ、信孝ニ當ラシメ、自ラ進ンテ勝家ノ將、佐久間盛政ヲ賤ヶ岳ニ破ル。

(結果) 秀吉、盛政ヲ賤ヶ岳ニ敗ルヤ、長驅シテ、勝家ヲ北ノ庄ニ

圍ム、勝家火ヲ放チテ自殺ス、是ニ於テ一益ハ降リ、信孝ハ自殺ス、蓋シ信長ノ遺業、此ノ時ヲ以テ、既デニ秀吉ノ手中ニ歸セリ。

(二八四) 秀吉ノ朝鮮征伐ノ顛末ヲ問フ

秀吉ノ朝鮮征伐ハ、前後二回ナレハ第一征第二征トシテ答フベシ
(第一征) 秀吉己ニ天下ヲ一統シ、百戰練磨ノ精兵ヲ有セシカバ、更ニ、明國ヲ併吞セント企テタリ、時ニ明主政ヲ失ヒ、武備ヲ怠ルト聞キシカバ、對馬國主、宗義智ニ命シ、朝鮮國王ニ諭シテ、明ヲ擊ツノ嚮導ヲナサシメントセシニ、朝鮮恐レテ命ヲ奉セズ、秀吉乃チ先ツ朝鮮ヲ征スベシトナシ、文錄元年、行營ヲ肥前ノ名護屋ニ作り、諸將ヲ部署シテ、海陸並ビ進ンテ、朝鮮ニ入ラシム、

我軍ノ朝鮮ニ入ルヤ、向フ所先ナク、直ニ王城ヲ陷レタリ、是ニ於テ國王李昭、義州ニ走リテ、援ヲ明國ニ求ム、此時我先鋒ノ將、加藤清正、咸鏡道ニ向ヒ、會寧府ニ至リテ、二王子ヲ擒ニシ、北進シテ兀良哈ニ至ル、別道ノ先鋒、小西行長、マタ平安道ヲ征服セリ、是ニ於テ八道悉ク我軍ノ席卷スル所トナリヌ、明帝コレヲ聽キテ大ニ恐レ、其將李如松等ヲ遣ハシテ之ヲ救フ、如松、行長ノ軍ヲ平壤ニ破リシカバ、勝ニ乘シテ益々至ル、小早川隆景、立花宗茂等、之ヲ碧蹄館ニ邀撃シ、斬首數萬、如松僅カニ身ヲ以テ遁ル、時ニ清正マタ國都ニ會セントセシカバ、如松マス、怖レテ、平壤ニ奔リ、復タ出テズ、是ヨリ先、沈惟敬、行長ニ就キテ和ヲ圖リ、如松ノ沮ム所トナリシガ、是ニ於テマタ和ヲ、行長ニ圖リ、韓ノ三道ヲ割キ、秀吉ヲ王ニ封ズル等ノコトヲ以テス、秀吉コレ

ヲ許シ、師ヲ旋サシム、軍ヲ出シテヨリ是ニ至ルマデ、殆ト一年。
 (第二征)慶長元年、明使揚方亨、沈惟敬、及朝鮮ノ使者黃慎等、
 伏見ニ至ル、秀吉朝鮮ノ未タ三道ヲ獻ゼザルヲ責メ、之ヲ見ルコ
 トヲ許サズ、特ニ明使ヲ延見ス、儀衛儼然タリ、僧承兌其冊書ヲ
 讀ム、書中「封ニ爾秀吉ニ爲ニ日本王」トノ句アリ、秀吉大ニ怒リ、
 其ノ冕服ヲ抛チ、我日本ニハ古來動キナキ皇室アリ、一系萬世ニ
 フタルノ帝王アリ、汝曹ノ隊ヲ容ルベキ所ニアラズト、即夜直
 ニ使者ヲ逐ヒ歸シ、小早川秀秋ヲ元帥トシ、總兵十五萬人、再ビ
 朝鮮ニ渡ル、朝鮮ノ諸城復タ大ニ潰エ、獨リ水軍ヨク戦ヒシガ、
 マタ行長ノ爲ニ破ラル、王マタ援軍ヲ明ニ求ムルコト急ナリ。時
 ニ天漸ク寒シ、我ガ諸將退キテ要所ヲ守リ、清正蔚山ヲ守レリ、
 明主邢玠等ヲ將トシ、大軍ヲ發シテ、先ツ蔚山ヲ圍マシム、清正

屈セズ、諸將急ヲ聞キテ赴キ援フ、清正門ヲ開キテ出デ、爽ミ撃
 チテ大ニ明軍ヲ破ル、伏屍累々、數十里絶エザリシト云フ、明マ
 ス、援軍ヲ發ス、島津義弘、泗川ヲ守リ、亦大ニコレヲ破リ、
 首ヲ斬ルコト、三萬餘級ニ及ビシト云フ、是ヨリサキ秀吉病ミテ
 薨シケレバ、遺命シテ師ヲ還サシメヌ、時慶長二年ナリ。

(二五) 秀吉ノ政治ノ大要ヲ記スベシ

秀吉ヨク心ヲ政事ニ用ヒ、五奉行、五大老ヲ置キテ、政務ヲ行ハ
 シメ、中古以降、大ニ亂レケル田制ヲ定メテ、租税ノ率ヲ正シ、
 大小判金、丁銀、及ビ銅錢ヲ改鑄シテ、頗ル貨幣ノ用ヲ備ヘシメ
 タリ、加之、尊王ノ志、甚タ厚カリケレバ、其志ヲ得ルニ及ビテ、
 神宮ヲ營シ、仙洞御所ヲ造リ、京都ノ美觀ヲ修飾シテ、大ニ皇室

ノ尊嚴ヲ増シ奉リシ等其功偉ナリト云フベシ。

(二六) 關ヶ原ノ戰ヲ記スベシ

(原因) 秀吉ノ薨後、諸奉行相謀リテ事ヲナセシガ、徳川家康威望漸ク加ハリ、且形勝ノ地ヲ占メ、幕下ノ武臣等、亦夕最モ驍勇ノ聞、高カリケレバ、石田三成先ツコレヲ除カンコトヲ計レリ。

(方策) 三成先ツ上杉景勝ト謀リ、景勝ヲシテ歸リテ會津ニ寄ラシメ、家康東伐ノ虚ニ乗シテ、毛利輝元等ト共ニ、大阪城ニ入ラント欲ス乃チ秀頼ノ命ヲ矯メ、檄ヲ四方ニ傳フ。

(西軍) 當時ノ諸侯ハ、概テ皆不逞ノ志ヲ有シ、時ヲ得テ、以テ天下ニ號令セント欲スルモノナリ、三成ノ檄ヲ得ルヤ、毛利輝元マツ來リ會シ、宇喜多秀家、小早川秀秋、島津義弘、小西行長、等關

西ノ諸將、多ク之ニ與ミセリ、其兵十八萬ト稱ス。

(東軍) 三成ノ奸佞ハ、人ノ知ルトコロトナリ、乃チ此舉ノ秀頼ノ旨ニアラザルヲ察シ、或ハ家康ノ容易ニ倒スベカラザルヲ察シ、カラ家康ニ併スルモノヲ、淺野行長、黒田長政、池田輝政、福島正則、細川忠興、山内一豊、加藤清正、黒田孝高等トナシ、其勢凡ソ八萬餘人ト稱ス。

(會戰) 東西ノ兩軍進ミテ關ヶ原ニ會スルヤ、戦闘最モ激シク、煙塵天ヲ蔽ヒ、喊聲地ニ震フ、偶々秀秋東軍ニ應ズ、本多忠勝、福島正則等、勢ニ乗シテ奮戦ス。

(結末) 西軍遂ニ大ニ破レ、輝元、義弘等皆其國ニ逃レ還リ、三成、行長等皆捕ヘラレテ斬ラル。

(結果) 此戰爭ハ實ニ家康ノ運命ノ決スル所ナリシガ、家康機ヲ見

ル敏捷、ヨク諸將ノ死命ヲ制シテ、大勝ヲ得ケレバ、威名層一層ヲ加へ、豊臣氏ノ勢力、日ニ縮小シ、遂ニ徳川氏ノ覇業ヲ成就セシメタリ。

(二七) 豊臣氏ノ滅亡ヲ記スベシ

豊臣氏ノ勢力ハ、關ヶ原ノ戦争ニヨリテ、遂ニ大縮小ヲナセシガ、其滅亡ハ左ノ二回ノ戦争ニアリ、
(大阪冬ノ陣)關ヶ原ノ戦役、天下ノ權ハ自ラ徳川氏ニ歸セシガ、慶長十九年、秀頼、京師ノ大佛ヲ鑄ルニ及ビ、家康己ヲ咒詛ストナシテ之ヲ責ム、秀頼ノ傅片桐且元、陳辨甚タ勉ムレトモ聽カズ、且元乃チ歸リテ三策ヲ陳ス、曰ク秀頼江戸ニ往テ罪ヲ謝スルカ、曰ク大阪城ヲ出テ、他ニ移ルカ、曰ク生母淀君ヲシテ江戸ニ質タラシ

ムルカ、此二者中、孰レカ其一ニ出テ、以テ家康ノ憤ヲ解キ、其禍ヲ緩ウスベシト、淀君聽カズ、却リテ且元ヲ殺サントス、且元其邑茨木ニ奔レリ、是ニ於テ淀君、其寵臣大野治長ト謀リ、兵ヲ四方ニ募ル、眞田幸村父子、後藤基次、長曾我部盛親等、及ビ浮浪ノ士ニシテ、來リ集ル者、殆ト五萬人、然レトモ有土ノ侯伯、一人ノ來應スルモノナシ、家康乃チ秀忠ト共ニ、大兵ヲ率井テ、來リテ之ヲ攻ム、城兵ヨク戦ヒシカ、和議遂ニ成リ、城ノ外濠ヲ填メ、客兵ヲ散ノ軍ヲ解ケリ、時慶長十九年十二月ナリケレバ、之ヲ大阪冬ノ陣ト云フ。
(大阪夏ノ陣)家康約ニ違ヒテ、其内隍マデヲモ填メケレバ、秀頼怒リテ其翌明和二年、再ビ兵ヲ擧ケヌ、家康父子ハ、兼子テ期スルモノ、如シ、直ニ大軍ヲ率井テ之ヲ攻メヌ、時ニ眞田幸村、宜シク天皇ヲ挾ミテ以テ天下ニ號令スベシト云ヒシガ、異議アリテ

行ハレズ、既ニシテ木村、後藤等ノ勇將、皆戰死シ、城遂ニ陥リ、秀頼、淀君皆自殺シ果テヌ、コレヲ大阪夏ノ陣ト云フ。

第十一章 德川氏時代

(二六) 家康ノ祖先ト其少時ノ略歴ヲ述フベシ

德川氏ハ、源義家ノ孫、新田義重ノ後裔ニシテ、南朝ノ忠臣、新田義貞ト其宗ヲ同フス、初メ上野ノ德川ノ邑ヲ領ス、故ニ德川氏ト稱ス、其後三河ニ移リ、岡崎ニ居ル、家康ノ父廣忠マデハ、僅カニ西三河ノ一部ヲ領セルニ過ギズ、家康岡崎城ニ生レ、小字ハ竹千代、時ニ織田信秀、尾張ニアリ、今川義元、駿河ニアリ、廣忠モト義元ト善シ、天文十六年正月、廣忠、伯父松平信孝ノ事ニ

ヨリ、織田信秀ト戰フニ當リ、家康ヲ質トシテ、援ヲ今川義元ニ請フ、途ニ駿河ヲ過キ織田氏ノ爲メニ拘セラレ、名古屋ニ赴キヌ、時ニ六歳、十八年廣忠薨ズ、家康計ヲ聞キ、哀慕成人ノ如シ、岡崎ノ諸臣相議シテ、織田氏ト和シ、以テ家康ヲ迎ヘント欲ス、然レトモ今川氏ヲ憚リテ未タ果サス、義元之ヲ聞キ、織田信廣ヲ攻メテ之ヲ敗ル、信廣即チ家康ヲ歸ラシメ、以テ其死ヲ赦ス、家康始メテ岡崎ニ歸ルコトヲ得タリ、後義元コレヲ駿河ニ徙ス、爾來コ、ニ居リシガ、信長ノ義元ヲ斬ルニ及ビテ、家康漸ク岡崎ニ歸ル、年十九。

(二九) 家康ノ秀頼ニ對スル策略如何

家康關ヶ原ノ一戰ニ於テ、既ニ天下ヲ得タリ、然レトモ豊臣氏恩顧

ノ將士少カラズ、其一タビ兵ヲ舉クルニ至ラハ、或ハ天下マタ豊臣氏ニ歸スル期ナシト爲ベカラズ、宜シク先ツ貧弱ナラシメ、其資ニ乏シカラシメザル可ラズ、乃チ先ツ秀頼ニ諭シテ、秀吉ガ曾テ不時ノ軍資ニ充ツルタメ、作ラシメタル金馬ヲ熔カシテ、方廣寺ノ大佛ヲ作ラシム、秀頼金馬ヲ熔カシ、鉅萬ノ財ヲ投シテ之ヲ修ルヤ、鐘銘ニ依テ難問ヲ搆ヒ、先ツ片桐且元ヲ退テ、之ヲ亡サントス、秀頼知ラス、其術中ニ陥リテ且元ヲ退ケタリ、是ニ於テカ、冬ノ陣トナリ、夏ノ陣トナリテ、豊臣氏滅ビ遂ニ家康ヲシテ其志ヲナサシム。

(二九) 家康ノ東本願寺ヲ立テタル真相如何

本願寺ハ、其宗徒強大ニシテ制シ難シ、且秀吉僧光佐ヲシテ、寺ヲ京ノ六條ニ建テシメ其子光昭ヲシテ門主タラシメケレバ、其勢力

更ニ一層ヲ加ヘタリ、家康關ヶ原ノ戰ニ勝チ、天下ヲ其掌中ニ握ルヤ、古ヘノ延曆寺、興福寺ノ如ク跋扈セラル、ヲ恐レ、即チ光壽ノ曾テ家康ニ内應シケルヲ名トシテ、別ニ一寺ヲ創立セシム、其六條ノ東ナルヲ以テ、之ヲ東本願寺ト云フ、實ハ其勢力ヲ分タシ爲ナリ。

(三〇) 德川氏ノ諸侯ヲ制スル政略如何

關ヶ原ノ一勝、先ツ敵黨諸侯ノ領地ニ、非常ナル大削減ヲ加ヘ、外様大名ノ肝膽ヲ寒カラシメ、次キテ封土縮小ノ策ヲ取リテ、機ニ乘シテ或ハ除邑シ或ハ土地ヲ削レリ、乃チ小早川秀秋、田中忠政等ハ子ナクシテ、國ヲ除カレ、堀忠俊、福島正則等ハ事ニ托シテ、國ヲ除カレタリ、然レモナホ廣大ナル土地ヲ領スル外様大名

少シトセズ、是ニ於テカ、參勤交替ノ制ヲ定メ、或ハ土木ヲ課シテ、務メテ貧弱ナラシメ、尙且邸宅ヲ江戸ニ設ケシメテ、妻子ヲコ、ニ居ラシメ、有事ノ際ノ質タラシム、次ギニ、我威德ノ隆ヲ天下ニ示サン爲メ、太政大臣ノ極職ニ進ミ、淳和獎學兩院ノ別當、源氏ノ長者トナリ、且密ニ和親ヲ朝鮮ニ求メテ、其ガ使節ヲ招キ、我ガ威德ヲ慕ヒテ、來聘スルガ如クニ見セシメタリ、德川氏ハ以上諸策ヲ以テ、ナホ充分ナリトセズシテ、更ニ大鎮壓策ヲ行ヘリ、乃チ外様大名ノ間ニ、譜代大名ヲ列置シ、以テ彼等ノ連衡シテ事ヲナスヲ避ケタリ、假令ハ、加賀ノ前田氏ニ備フル爲メニ、越前ニ親藩ヲ置キ、越後ニ譜代ヲ置キ、山内氏ニ備フル爲メニハ、伊豫ニ松山、讃岐ニ高松等ノ親藩ヲ封シタリ、東北ナル伊達、上杉、佐竹等ニ備フル爲メニハ水戸ト會津トアリ、中國ナル毛利氏ノ爲

メニハ両池田氏ト淺野氏トヲ置キ、兩國ナル島津氏ノ爲メニハ、細川、黒田、奥平、小笠原等ヲ置ケリ、且鎌倉政府ノ制ニ倣ヒテ、關東形勝ノ地ヲ以テ、根據ノ所トナシ、コレヨリ東海道ヲ歷テ、畿内ニ至ルマテハ、悉ク譜代ト親藩トヲ布置シテ本邦ノ中心タル要地ヲ占メ、紀州ニ親藩ヲ置キ、大阪ニ城代ヲ置キテ、以テ西國ノ咽喉ヲ扼セリ、コレ其三百年間ノ太平ヲ得シ所以カ。

(二二) 德川氏ノ朝廷ニ對スル政略如何

德川氏ノ朝廷ニ對スルヤ、表面之ヲ尊崇セルモノ、如キモ、其實際ニ於テハ、頗ル之ヲ制壓セリ、乃チ公家十七條ヲ撰ミテ、天子親王、公家、門跡等ノ權限ヲ定メ、其思想ヲ詩歌、管絃ノ遊技ニ止メシメテ、政事ニ與ラシメズ、且其動靜ヲ窺ハン爲メニ、譜代

諸侯ノ内ヨリ、人才ヲ撰ミテ、京師ノ所司代トナシ、ナホ其下ニ
禁裡付、新院付等ノ職ヲ置キ、幕府ノ士ヲ以テ之ニ充テ、以テ宮
門ヲ警衛セシメタリ、加之、貧弱策ハナホ皇室ニモ及ホシ、其供
御料僅ニ十一萬千百餘石ト金貳千兩トノミ、僅ニ中等諸侯ノ身代
ニ過キス、今左ニ細カニ之ヲ舉クベシ、
禁裡御料

貳萬石 (御科ノ堤、川除等ノ諸費用モ此内ヨリ辨ズ)

五千石 新院御料

五千石 本院御料

九百石 女中衆切米

金貳千兩

合高三萬〇九百石

合金貳千兩

親王、諸公卿ノ秩祿

總高八萬〇貳百貳拾九石九斗

以上合計高拾壹萬壹千壹百貳拾九石九斗

合計金貳千兩

(二) 東叡山ヲ起シ、深意如何

東叡山ヲ起シタル所以ハ、如何ナル必要ト、如何ナル名目トニヨ
リタルカハ、暫クコレヲ措キ、必ず法親王ヲ迎ヘテ、コレガ座主
トナシタル事實ニヨリテ考フレハ、モシ事アルニ於テハ、彼ノ足
利氏ノ故智ニ倣ヒ、擁シテ以テ朝廷ニ抗セントスルノ下心タルベ
キハ、敢テ識者ヲ待チテ後、コレヲ判スルヲ待タザル所ナリトス、

乃チ東叡山ヲ上野ニ置キタル、徳川氏ノ深意斯ノ如シ。

(二四) 徳川氏ノ初年ニ於ケル我國人ノ海事思想如何

秀吉ノ朝鮮ヲ征セルニヨリ、我國人ノ海事思想ハ漸ク發達セシガ上、徳川家康ハ、朱印狀ヲ與ヘテ、海外ノ通商ヲ許セシカバ、元和偃武ノ後ハ、有爲ノ士人ノ外國ニ航セル者少カラザリシ、伊達政宗ノ家臣支倉常長ハ、慶長十六年ヲ以テ、羅馬ニ渡航セリ、常長先ツ呂宋ニ至リ、太平洋ヲ横キリテ、墨其哥ニ至リ、更ニ大西洋ヲ航シテ、西班牙ニ達シ、遂ニ羅馬ニ至リテ、羅馬法王ニ謁シ、宗教、風俗ヲ視察シテ、以テ歸レリ、此行七ケ年ノ歲月ヲ經タリト云フ、秀忠將軍ノ時、山田長政ハ暹羅ニ渡リ、其國王ノ爲メニ、内亂ヲ平定シテ、六昆國王ニ封セラレ、遂ニ暹羅王ノ女婿トナリ

テ、威名ヲ振ヒヌ、尋テ寛永ノ始メニハ、津田又左衛門マタ暹羅國ノ爲メニ戰功ヲ立テ、王女ニ尙シタリ、濱田彌兵衛モ亦タ此頃ノ人ニシテ、臺灣ニ據レル、和蘭人ノ首領ノ、我商品ヲ劫掠セシヲ懲ラシテ、彼ノ子ヲ質トシテ連レ歸リ、且數多ノ方物ヲ獻セシメタリキ、當時我國人ノ海事思想ハ概ネ斯ノ如クナリシ。

(二五) 我國人ノ海事志想ノ萎微シタル原因如何

家康外國トノ通商貿易ヲ許スト雖モ、耶穌教徒ノ野心アルヲ看破シケレバ、國人ノ之ヲ奉スルコトヲ禁シ、コレガ宣教師ヲ國外ニ放逐シ、背ク者ハ酷刑ニ處シタリシガ、未タ以テ殲滅スルニ至ラズ、遂ニ島原ノ亂ヲ醸スニ至リケレバ、幕府ハ外國人ノ本邦ニ入ルヲ禁ジ、タ、僅カニ和蘭、支那、朝鮮ノ三國ニノミ、長崎港ヲ限

リテ通商ヲ許スコト、ナシ、又國人ノ外國ニ航スルヲ嚴禁シ、天下ニ令シテ、大船巨舶ヲ造ルコト勿ラシメシカバ、耶蘇教ヲ奉スルモノ、全ク亡ブルト共ニ、國人ノ海事思想ハ、コ、ニ全ク沈靜シ、遂ニ萎縮マタ振ハザルノ有様ヲ呈スルニ至レリ。

(二六) 島原ノ亂トハ如何

家康、耶蘇教ヲ奉スルコトヲ嚴禁スト雖トモ、西國ニハ、竊ニ之ヲ奉ズルモノ尙ホ尠カラズ、然ルニ關ヶ原ノ役ニ滅ビタリシ、小西行長等ノ遺臣、漸ク西國ニ相會シ、遂ニ益田四郎ヲ奉ジ、肥前島原ノ耶蘇教徒ヲ煽動シケレバ、茲ニ四萬有餘ノ大衆ヲ得ルニ至リ、其勢甚タ盛ナリ、將軍家光、板倉重昌ヲ遣ハシテ、之ヲ征セシメシガ、未タ勝ヲ制スル能ハズ、尋テマタ松平信綱ヲ遣ハス、

信綱乃チ漸クコレヲ平ラク、是ヲ島原ノ亂ト云フ。

(二七) 德川光圀ノ事蹟ヲ問フ

光圀ハ水戸ノ藩主、頼房ノ子ナリ、賢明ニシテ、學ヲ好ミ、屢々忠臣孝子ヲ賞シ、湊川ニ楠正成ノ碑ヲ建テ、ソノ精忠ヲ表セリ、光圀嘗テ俄ガ國ニ完全ナル國史ナキヲ患ヒ、諸名儒ヲ聘シ、共ニカヲ協セテ、大日本史ヲ編セリ、世コレヲ良史ト稱ス、マタ國內ノ淫祀、三千八十餘宇、新寺九百九十餘宇ヲ毀チ、砲戒僧ヲ民伍ニ編セル等、其事蹟ノ賞スベキモノ、頗ル多シ。

(二八) 水道ヲ江戸市ニ設ケシ始メヲ問フ

初メ家光、江戸市中ノ井水甚タ惡シキヲ憂ヒシガ、府下ノ市人清

右衛門ナルモノ、玉川ノ水ヲ引カンコトヲ請ヒ、弟莊右衛門ト共ニ、工事ヲ起シ、渠ヲ鑿ルコト十三里、四ツ谷ヨリ水樋ヲ埋メ、之ヲ府下ニ達ス、コレヲ江戸市水道ノ始メトナス、幕府清右衛門等ノ功ヲ賞シテ、コレニ玉川ノ姓ヲ賜ヒキ。

(二九) 御光明天皇ノ御叡明ヲ記シ奉リ魚屋八兵衛ノ至誠ヲ附記スベシ

後光明天皇ハ、後水尾天皇ノ御子ニシテ、幼ニシテ御位ニ即カセラレケルガ、既ニ長ジテ、學問ヲ好マセラレ、頗ル叡明ノ聞エ高カリキ、初メ甚タ雷ヲ畏レ、程子ノ克ハニ已ニ須ク從ヒ性ノ偏ノ難キ克チ所ニ克ニ將去ルトイヘル語ヨリ、疾雷ノ日、殿端ニ靜坐シ給ヒシガ、是ヨリ、マタ忌ミ給ハザルニ至リキ、天皇復古ノ御志在マシテ、常ニ

宣ハク、王道ノ衰頹ヲ來セシハ、朝臣ノ文弱ニ流レ、淫靡ヲ事トスルニヨレバナリ、朕酷ク之ヲ惡ムト、サレバ文學ノ外、擊劔等ニモ御心ヲ寄セサセ給ヒ、マタ武家ノ頭髮ヲ剃リ、上下ヲ著クルコトノ、古制ニアラザリシカバ、命ヲ關東ニ下シテ、コレヲ改メシメヌ、マタ大學諸寮ノ荒廢セルモノヲ、復興セラレントノ御計畫アラセラレケルカ、會々痘ヲ病ミテ、暴ニ崩シ給ヒヌ、御年僅ニ二十二ナリキ、朝議先例ニヨリテ、火葬シ奉ラントス、魚屋八兵衛コレヲ聞キテ謂ラク、先帝世ニ在シ、時、常ニ佛法ヲ忌マセラレヌ、今其忌マセラル、所ヲ以テ、終ヲ送り奉ルハ、臣子ノ禮ニアラズト、是ニ於テカ身仙洞、攝關ノ門ニ奔走シ、號泣哀訴シテ、以テコレヲ止メタリ、朝廷其至誠ニ感シテ、遂ニコレニ從フコト、ナリヌ、是ヨリ列朝、マタ茶毘ヲ用井ザルニ至レリ、帝德

ヨク草萊ヲ感化シ、至誠ヨク天地ヲ撼カスト云フベキカ。

(三〇〇) 五代將軍ノ犬公方ト呼ハル、所以如何

五代將軍綱吉子ナシ、知恩院ノ僧、隆光説テ曰ク、人ノ嗣ナキハ、前世多殺ノ報ナリ、宜シク殺生ヲ禁シテ、其罪ヲ酬フベシ、且將軍成年ヲ以テ生ル、最モ犬ヲ愛セラルハシ、ト綱吉コレヲ信シテ、數多ノ犬ヲ飼ハシメ、且ツ犬ヲ殺スモノアルトキハ、之ヲ處スルニ嚴刑ヲ以テセリ、サレハ世ニ將軍ヲ呼ビテ、犬公方トナシ、怨望スルモノモ少カラザリキ。

(三〇一) 赤穂ノ復讐ノ次第ヲ記スベシ

元祿十四年、朝廷大納言柳原資廉等ヲ、年賀ノ勅使トシテ、關東

ニ下ラシム、幕府乃チ赤穂城主、淺野長矩等ヲシテ、敕使ヲ饗應セシム、長矩舊儀ニ通セズ、之ヲ吉良義央ニ問フ、吉良氏ハ高家ニシテ典例ヲ司ルノ職ナレバナリ、然ルニ義央慢ニシテ禮ナク、剩サヘ長矩ヲ殿中ニ辱メシカバ、長矩怒リテ之ヲ傷ツク、幕議長矩ニ死ヲ賜ヒ、悉ク其所領ヲ沒収ス、赤穂ノ老臣、大石良雄等、主家再興ヲ謀リテ成ラズ、遂ニ復讐ヲ企テ、同志ノ士四十七人、二年ノ辛酸ヲ嘗メテ遂ニ義央ノ邸ヲ襲ヒ、コレヲ殺セリ、コレヲ赤穂義士ノ復讐ト云フ、後幕府、萩生茂卿ノ義ヲ採リテ、良雄等ニ死ヲ賜ヒ、之ヲ泉岳寺ナル長矩ノ墓側ニ葬ラシム、世ニコレヲ四十七義士ノ墓ト稱シテ、香花今ニ絶エズ。

(三〇二) 元祿時代ノ風俗如何

天草亂後、天下事ナカリケレバ、百姓殷富ニ趣キ、世ハ風流華奢ニ傾キタリ、サレバ文學技藝モ大ニ進歩シ、女ノ着物ノ袖長ク、帶ノ幅ノ漸ク廣クナリシモ、此時代ノ頃ナリ、又常憲院時代ノ蒔繪ト稱シテ、後世ニマデ歎美セラル、モノ、出來セシモ、マタ此時代ニアリ。

(二〇三) 新井君美ノ事蹟ヲ問フ

新井君美、字ハ在中、白石ト號ス、元祿六年、甲府ノ辟ニ應シテ、經筵ニ文昭公ニ侍ス、文昭公立チテ將軍トナルニ及ビテ、侍講トナリ、尋キテ寄合ニ列シ、幕政ニ參ス、寶永八年、朝鮮ノ使臣ト接見シ、詩文、筆話ヨク彼ヲ感セシム、文昭公薨ズルニ及ビテ、君美マタ職ヲ解キ、門ヲ杜ギ、客ヲ謝シ、日夜典籍ヲ以テ樂トナ

セシカ、享保十年病ミテ卒ス、年六十九、其著ストコロ、藩翰譜、經邦典例、西洋紀聞、東雅、本朝軍器考、采覺異言、南島誌、蝦夷誌、讀史餘論等アリ。

(二〇四) 德川吉宗ノ事蹟ヲ問フ

吉宗ハ、家康ノ曾孫ニシテ、紀伊侯德川光貞ノ第三子ナリ、寶永二年、紀伊ノ封ヲ襲キ、正徳六年五月迎ヘラレテ、江戸ノ本城ニ入ル、吉宗、天資總明ニシテ、民ヲ愛シ、特ニ治世ノ大能アリ、前代ノ弊制ヲ革メ、銳意治ヲ勵ミ、施設スル所多シ、是ニ於テ紀綱大ニ張ル、故ニ世吉宗ヲ稱シテ中興ノ英主トナス、今施設ノ事業ヲ、左ニ舉クベシ。

(殖産)ハ吉宗ノ尤モ注意セルトコロニシテ、諸國ニ命ジテ朝鮮人

參、甘藷、甘蔗等ヲ栽培セシメテ、砂糖ヲ造ラシメ、以テ支那、朝鮮ヨリノ輸入ヲ防キ、又阿波ノ藍、紀伊ノ蜜柑、薩摩ノ煙草、上野、信濃及奥羽ノ蠶業、土佐ノ製鹽及ヒ鯉節ヲ始メ、諸國ノ名産勃興シテ大ニ國家ノ富ヲ増セリ。

(教育)ニモマタ大ニ心ヲ用ヒ、室直清ニ六諭衍義ヲ譯セシメテ、寺小屋ニテ之ヲ教ヘシメ、青木文藏ヲシテ、蘭書ヲ學バセ、中根玄圭ヲシテ、歐洲ノ曆法ヲ考索セシメタリ。

(刑事)家康以來、定マレル刑法ナカリシガ、吉宗大岡忠相等ト議シ、御詔書百ヶ條ヲ定メクリ、刑ハ叱リ、過料、手鎖、敲キ、追放、遠島、死罪等ニシテ、引キ廻シ、晒シ、入レ墨、闕所等ノ附加刑アリ、士分以上ノ者ニハ刑ヲ加ヘズ、其破廉恥罪ヲ犯シ、モノニハ、先ヅ、士分格式ヲ覆ヒ、後、常人ノ刑ヲ加ヘタリ。

(尙武)當時ノ人民、多クハ遊惰安逸ニ流レケレバ、吉宗自ラ弓、馬、鎗、劍ノ術ヲ試ミ、賞賜スル所多シ、故ニ海内ノ士心、翕然トシテ武ヲ尙ビ、其術大ニ進ミタリキ。

吉宗ノ施設セル所、タダ茲ニ止ラズ、又大ニ武備ヲ獎勵シ、山陵ヲ修メ、忠孝節義ヲ旌表シ、鰥寡孤獨ヲ賑恤スル等、仁政下ニ普ク、政績ノ見ルベキモノ頗ル多シ。

(二五) 松平定信ノ事蹟ヲ記セ

松平定信ハ、吉宗ノ孫ニシテ、出テ、白河ノ城主トナリ、樂翁ト號セシ人ナリ、賢明ニシテ學識アリ、其幕府ノ執政トナルヤ、自ラ粗衣粗食シテ、風俗ヲ正シ、文武ヲ勵マシ、人材ヲ擧ケ用ヒシカハ、幕政再ビ振フニ至リヌ、コレヲ寛政ノ治ト云フ。

(三〇六) 寛政ノ三奇士トハ如何

上野ノ人、高山彦九郎、下野ノ人、蒲生君平、仙臺ノ人、林子平ヲ云フナリ、共ニ憂國慷慨ノ士ニシテ、彦九郎ハ主トシテ、勤王論ヲ唱へ、君平ハ王家ノ衰頹ヲ嘆キテ、職官志及ビ山陵志ヲ編シ、子平ハ海防ヲ論シテ、海國兵談、三國通覽等ノ書ヲ著ハシタリ、然レモ三士マタ時ヲ得ズシテ、空シク奇士ノ名ヲ負ヒテ、黄泉ニ入リヌ。

(三〇七) 蝦夷ノ騷擾ヲ記スヘシ

寛政五年、露人我ガ漂民ヲ送リテ、蝦夷ニ來リ、互市ヲ請ヘリ、幕府之ヲ許サレキ、是ヨリ先、露船屢々樺太、千島ノ近海ニ出沒

シケルガ、此頃ヨリ漸ク北邊ヲ侵掠セリ、是ニ於テ幕府近藤守重ヲ遣ハシテ、蝦夷ヲ巡視セシメシニ、露人ハ既ニ擇捉島ニ、十字ノ標柱ヲ建テケレバ、守重コレヲ拔キテ、更ニ大日本と云フ府ト云フ標柱ヲ建テ、歸リキ、是ヨリ幕府邊備ノ忽ニスベカラザルヲ察シ、函館奉行ヲ置キ、戍兵ヲ屯セシムルコト、ナシヌ、其後、露人屢々入寇セシカバ、我戍兵其八人ヲ虜ニシタリキ、サレド露人ハ樺太ニ移住スル者益々多ク、且英吉利船モ、マタ長崎ニ來ルニ至リヌ、是ヨリ我邦ノ外交、漸ク頻繁ナルニ至レリ。

(三〇八) 米艦渡來ニ對スル國論如何

露船來リ、英船來ルニ及ビテ、國論ハ開港通商ト、鎖港攘夷トノ二派ニ別レシガ、鎖港ハ家光以來ノ國是ナレバ、容易ニ變スルコ

ト能ハサルノミナラズ、水戸藩士徳川齊昭ハ、長文ノ意見書ヲ草シテ、コレヲ幕府ニ上リ、其通商スヘカラサルノ理由ヲ述ヘタリ、斯クテ嘉永六年ニ至リ、米國ノ使節、水帥提督ペルリ、軍艦四艘ヲ率キテ、浦賀ニ來リ、國書ヲ呈シテ、通商貿易ヲ求メタリ、幕府、浦賀奉行ニ命シ、國法ヲ論シテ、去ラシメントシタレトモ、ペルリ聽カズ、必ラズ確答ヲ得ンコトヲ請フ、幕府止ムヲ得ズ、國書ヲ受ケ、明年ヲ約シテ歸ラシメヌ、是ニ於テ幕府米國ノ處置ニ苦ミ、意見ヲ諸侯ニ問フニ至レリ、時ニ攘夷論最モ盛ニシテ、開港ヲ論スルモノ殆トナカリキ、サテ年ハ明ケヌ、米艦ハ來レリ、幕府益々苦ミ、更ニ確答ノ期ヲ延ベンコトヲ論シケレトモ、ペルリ聽カズ、幕府遂ニ下田、函館、及ビ長崎ノ三港ヲ開キ、糧食、薪水等ノ必要品ヲ給與スルコトヲ許セリ、尋テ露、英、佛ノ三國ニモ亦タ

コレヲ許セリ、サナキダニ、幕府ノ處置ノ緩慢ナルヲ憤レル輩ハ、茲ニ躍起トナリテ、幕府ヲ攻撃非難スルコト、ハナレリ。

(三〇九) 假條約締結ノ次第ヲ問フ

安政三年、米國ノ使節マタ來リテ、通商貿易ヲ請フ、幕府コレガ勅許ヲ得ンコトヲ請ヘトモ、聽サレザリシガ、井伊直弼大老トナルニ及ビ、時勢ノ急ナルヲ察シ、獨斷ニテ米國ト、假條約ヲ結ビ、長崎、函館、神奈川、兵庫、新潟ノ五港ヲ開キテ、貿易ヲ許シ、尋テ英、露、佛、蘭ニモ、マタコレヲ許セリ。

(三〇) 安政ノ獄トハ如何

直弼獨斷ヲ以テ條約ヲ結ブヤ、國論益々沸騰ンケルガ、此時ヲ以

ヲ將軍家定薨セリ、直弼幼主ヲ紀伊ヨリ迎ヘ立ツ、之ヲ十四代家茂トナス、是ニ於テ、直弼ヲ攻撃スルノ聲ハ、彌々高シ、時ニ水戸ノ士ハ、京師ノ攘夷家及公卿ノ盡力ニテ、竊ニ攘夷ノ密旨ヲ得タリ、直弼之ヲ探知シ、近衛、三條等ノ公卿ヲ幽シ、水戸侯齊昭、尾張侯慶恕、越前侯慶永等ヲ禁錮シ、梅田源二郎、頼三樹三郎、橋本左内等ノ浪士、五十餘人ヲ刑ニ處セリ、是ヲ安政ノ獄ト云フ。

(三二) 櫻田ノ變ヲ記スベシ

(原因)安政ノ獄

(事實)萬延元年三月三日、伊井直弼、雪ヲ冒シテ登城セントス、水戸脫落ノ浪士、佐野竹助之等十七人、之ヲ櫻田門外ニ要撃シ、直弼ヲ刺セリ。

(三三) 坂下ノ變トハ如何

(原因)安藤信正老中トナリテ、直弼ノ遺旨ヲ繼キ、且公武合體論ヲ唱ヘ、皇妹、和宮親王ヲ、家茂ニ尙シ給フ。

(事實)下野ノ人、河野顯三等六人、信正ヲ坂下門外ニ要撃シテ、コレヲ傷ケタリ。

(三三) 櫻田坂下二變後ノ景況如何

櫻田坂下二變後ハ、幕府ノ權威大ニ衰ヘ、攘夷論者ノ暴行頗ル甚シカリケレバ、詔シテ薩摩ノ島津久光、長門ノ毛利慶親、土佐ノ山内豐範等ヲ召サセラレテ、京師ヲ守護セシメ、勅使ヲ下シテ、幕府ノ改革ヲ命シ給フ、幕府即チ松平慶永ヲ以テ、政事總裁トナ

シ、一橋慶喜ヲ以テ、將軍ノ後見トナシ、大ニ政治ノ方針ヲ改革セリ。

(三四) 生麥ノ變ノ次第及其結果如何

島津久光、勅使ヲ護衛シテ江戸ニ下ル、其歸途、英人、久光ノ先衛ヲ生麥村ニ衝ク、齒簿ノ士即チコレヲ斬ル、英人怒リテ償金ヲ幕府ニ強請シ、尋テ鹿兒島灣ニ入り、更ニ償金ヲ薩藩ニ需ム。

(三五) 長州征伐ノ次第ヲ問フ

(原因)薩長土ノ三藩、共ニ京師ヲ警衛セシガ、朝議ノ俄ニ變スルノ結果トシテ、長藩ノ警衛ヲ解クコト、ナリ、國ニ還ラシメヌ、時ニ長藩ト意見ヲ同シクセル、三條實美等ノ七卿ハ、共ニ長州ニ

走レリ、朝廷乃チ長藩士ヲ屏居セシメ、七卿ノ官爵ヲ削リ、長人ノ入京ヲ禁シタリ、是ニ於テ長藩ノ家老、福原越後、益田右衛門等、兵ヲ率井テ伏見ニ至リ、藩士及七卿ノ罪ヲ許サレンコトヲ請フ、且ツ君側ヲ清ムト稱シテ、兵ヲ進メテ京師ニ入り、大ニ會津、薩摩ノ兵ト戦ヒ、遂ニ敗レテ國ニ歸ル。

(事實)幕府、長人暴舉ノ罪ヲ問ハザルベカラズトナシ、徳川慶勝ヲ總督トナシ、諸藩ノ兵ヲ率キテ、廣島ニ至ラシム、時ニ長藩ノ俗論黨勢ヲ得、福原等ヲ殺シ、謝書ヲ致シテ、事漸ク解ク、翌年俗論黨倒レテ、高杉晋作等再ビ勢ヲ得ルニ至リケレバ、幕府再ビ征長ノ師ヲ起シ、將軍自ラ大阪城ニ赴キヌ、ユノ時藩長二藩、窺ニ連合セシカバ、幕軍大ニ敗北セリ、

(結末)幕軍ノ敗聞、頻リニ至ル間ニ於テ、將軍家茂、軍中ニ薨シ

ケレハ、詔シテ征長ノ師ヲ止メシメタリ。

(三六) 德川氏政權奉還ノ次第ヲ問フ

長州征伐ノ師、功ヲ修メザルニ、軍ヲ還スニ至リケレバ、幕府ノ威信、茲ニ全ク衰ヘ、王政復古ノ聲漸ク高マリ、薩、長、土、肥、ヲ始メトシ、諸藩心ヲ皇室ニ傾クル折柄、土佐ノ藩主、山内豊信、書ヲ幕府ニ獻シテ大政ノ奉還スベキヲ論シ、且其臣後藤象次郎、小松帶刀ヲシテ將軍慶喜ヲ説カシメケレバ、慶喜遂ニ意ヲ決シテ、大政ヲ奉還スルニ至リ、賴朝以來、凡七百年間、武家ノ掌中ニアリシ大權ハ、茲ニ全ク、皇室ニ歸スルニ至レリ。

(三七) 朝廷復權ノ遠因及近因ヲ列記スルヲ需ム

- 1、德川光圀ノ尊王主義
- 2、國學家ノ國體論
- 3、松平定信尊號ヲ上ルニ異議ヲ容レ、人心ヲ失ヒシコト、
- 4、通商貿易ニ勅裁ヲ請ヒナカラ、却リテ之ヲ奉セズ、爲メニ志士ヲ激昂セシメシコト
- 5、安政ノ大獄ト、皇妹ノ降嫁(是亦志士ノ激昂ヲ招ケリ)
- 6、長州征伐ノ不結果。

(三八) 德川氏時代ニ於ケル貨幣ヲ問フ

(金貨)慶長大小判、元祿大小判、乾字小判、萬延大小判、元祿二朱金、二分金等
(銀貨)寶字銀、南鐐銀、新文字、二銖銀、一銖銀等、

(小貨)寛永通寶、寛永通寶、天保通寶等
以上ノ内、慶長中ニ鑄造セル者ハ、其質、純良ナリシカ、綱吉ノ
頃ニ至リテ、大ニ亂レケレバ、家繼、吉宗等、コレヲ改メタレト
モ、末世ニ至リテハ、其質粗惡トナリ、弊害マタ大ナリキ、又吉
宗ノ時代ヨリ、諸藩ニ藩札ナル、紙幣ノ行ハル、コト、ナレリ。

(三九) 徳川時代ノ風俗如何

幕府ノ禮義ハ、専ラ足利氏ノ舊ニ依リテ、衣冠輿馬ノ制モ、亦概
ネ、足利氏ノ遺風ヲ存セリ、タゞ肩衣ヲ以テ、土人ノ常服トナセ
ルハ、蓋當代ノ新制ナリ、又平常ニ羽織ヲ用ヒシハ、蓋道服ノ一
セルモノニシテ、士庶人皆之ヲ着ケタリ、男女革足袋ヲ用キシ
ハ、既ニ古キ事ナルガ、明曆ヨリ後一變シテ、白木綿ニテ製セル

モノヲ用ウルコト、ナレリ、女子ノ帯ノ漸ク廣クナリ、袖ノ漸ク
長クナリシモ、此頃ヨリノコトナリ、遊戯ニハ、猿樂、圍碁、茶
ノ湯等行ハレシガ、寛永以來、歌舞伎、淨瑠璃ナト漸ク起リテ、
猿樂ニ代ルニ至リ、大ニ士民ノ風俗ヲ破ルニ至レリ。



第三編 近世史

第十二章 明治ノ御代

(三〇) 太政復古ノ新官制如何

慶喜大政ヲ奉還セリ、公卿及大小名等相會シテ、新官制ヲ建テ、總裁、議定、參與ノ三職ヲ置クコト、ナシ、有栖川熾仁親王ヲ總裁ニ、仁和寺宮嘉彰親王及三條實美、島津久光、山内豊信、淺野長勳等ヲ議定ニ任シ、岩倉具視、西郷隆盛、大久保利通、後藤象次郎等ヲ以テ參與ニ任シ給ヘリ。

(三三) 太政奉還後ノ慶喜ノ動靜如何

新官制成ルヤ、慶喜コレニ與カラス、心平カナル能ハザルニ、會津、桑名ヲ始メトシテ、幕府恩顧ノ家人等ハ、其不平ヲ訴ヘテ止マズ、遂ニ明治元年正月、兵ヲ擧ケテ京師ニ上ラントス、京師コレヲ聞クヤ、薩長ノ兵ヲシテ、之ヲ鳥羽伏見ニ拒カシム、慶喜入ル能ハズシテ、江戸ニ逃レ去レリ、朝廷、有栖川宮ヲ征東大總督

トナシ、西郷隆盛等ヲ參與トシテ、江戸城ニ向ハシム、慶喜ハモトヨリ、勤王家ナリ、其江戸城ニ入ルヤ、家人ノ主戰論者ヲ斥ケ、一意恭順ヲ旨トシ、勝安房、山岡鐵太郎ヲシテ、其意ヲ大總督ニ申サシム、大總督乃チ慶喜ノ死ヲ宥シテ水戸ニ屏居セシメ、徳川家達ヲ以テ其嗣トナシ、駿遠、陸奥ノ地ニ於テ七十萬石ヲ賜ヘルコト、ナレリ。

(三三) 新政ノ大方針如何

今上即位ノ始メ、公卿諸侯ヲ召サセラレテ大方針ヲ宣ハセ給フ乃チ五ヶ條ノ御誓文コレナリ、今コレヲ左ニ擧クベシ、
一、廣ク會議ヲ起シ、萬機公論ニ決スベシ、
二、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

三、官武一途、庶民ニ至ルマテ各々其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス
四、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ
五、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ

(三三) 征韓論ノ次第如何

新政コ、ニ成リケレバ、使ヲ朝鮮ニ遣ハシテ、好ヲ修メントセシニ、彼レ却リテ無禮ノ振舞アリケレバ、明治六年西郷隆盛、江藤新平、板垣退助、後藤象次郎等、征韓論ヲ唱へ、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通等ハ之ヲ非トシテ、廟議ニ派ニ別レシガ、西郷等其意思ノ達セザリシヲ以テ、遂ニ官ヲ辭スルニ至レリ。

(三四) 臺灣ノ役ノ顛末ヲ問フ

(原因) 臺灣人、我漂民ヲ虐殺ス。

(事實) 臺灣ハ、モト清國ノ屬地ナリケルガ、我漂民ヲ虐殺スルコト、數度ニ及ビシカバ、コレヲ清國政府ニ詰問セリ、清國政府彼ハ化外ノ民ナリトテ、更ニ取り合ハス、是ニ於テカ、西郷從道ヲシテ、兵ヲ率井テ臺灣ヲ討タシム。

(結末) 既ニシテ清國、異議アリ、我政府ハ大久保利通ヲ、全權辦理大臣トシテ、清國ニ遣ハシ、辨論數回ノ末、償金五十萬兩ヲ、彼ニ出サシメテ局ヲ結ベリ。

(三五) 佐賀ノ亂、熊本ノ亂及山口ノ亂、如何

佐賀ノ亂ハ、江藤新平島義勇等ノ起セル所ニシテ、大久利保通、野津鎮雄等討チテ之ヲ平ラゲ、熊本ノ亂ハ、神風連ノ一撥ナリシガ、熊本鎮臺兵討チテ之ヲ平ラゲ、山口ノ亂ハ、前原一誠ノ企ツルトコロニシテ、遙ニ神風連ニ應セントセシガ、幾ナラズシテ平ギヌ。

(三六) 西南ノ役ノ顛末如何

西郷隆盛ハ、征韓論ノ合ハザルヨリ、故國ナル鹿兒島ニ歸リ、私財ヲ投シテ、私學校ヲ興シ、ガ、篠原國幹、桐野利秋等モ、マダ還リテ之ヲ佐ケタリ、隆盛ハ維新ノ功臣ニシテ、威望一世ニ高カリケレバ、薩藩士人ノコレヲ敬スルコト、殆ト神ノ如ク、皆爲ニ生命ヲモ惜マザル程ナリキ、斯クテ利秋等、私學校ノ生徒ト共ニ、

不穩ノ企アリト聞エケレバ、政府ハ鹿兒島ナル彈藥製造所ヲ、阪ニ移シテ不虞ニ備ヘシム、時ニ私學校ノ徒、群集シテ之ヲ掠奪シ、且ツ政府ニ問フ所アリトナシ、強テ隆盛ヲ擁シテ、熊本鎮臺ヲ攻メタリ、此頃天皇、京都ニ行幸中ナリシガ、直ニ有栖川熾仁親王ヲ以テ、總督トナシ、陸軍中將山縣有朋、海軍中將河村純義等ヲ參軍トシ、各鎮臺ノ兵ヲ發シテ、筑後地方ヨリ出征セシメラル、時ニ熊本鎮臺ハ重圍ノ中ニ陥リケレド、司令長官谷干城ヨク防キ、敵兵攻メアグミケル折柄、陸軍中將黒田清隆、同少將山田顯義等、別働隊ヲ率ヰテ、賊背ヲ衝キケレバ、隆盛等力盡キテ、遂ニ戰死セリ、時ニ明治十年九月ナリ。

(三七) 維新以後我國ト朝鮮トノ交渉ヲ記セ

明治八年、我軍艦朝鮮ノ江華島近傍ヲ過グ、彼守兵不意ニコレヲ砲撃ス、我立ロニ應戰シテ、土民數十人ヲ殺ス、是ニ於テ參議黒田清隆、議官井上馨ヲ朝鮮ニ遣ハシ、謝罪ノ狀ヲ出サセ、且修好條約ヲ結ビテ還レリ、是ヨリ先、朝鮮ハ清國ノ附屬ノ如クナリシガ、我ハ是ヲ獨立ト認メケレハ、彼ニモ又ニ大黨ヲ生ズルニ至レリ、一ハ我國ニヨリテ、國政ヲ改メントスル者、コレヲ獨立黨ト云ヒ、一ハ清國ニ從屬セントスル者、コレヲ事大黨ト云フ、此二黨互ニ相軋リシガ、明治十五年、事大黨ハ國王ノ生父、大院君ヲ奉シテ王宮ニ入り、又我公使館ヲ襲フニ至レリ、辦理公使花房義質、其罪ヲ責メ、償金五十五萬圓ヲ出サセテ事平キヌ、後我が政府ハ、彼ガ貧弱ヲ憐ミ、其殘レル償金四十萬圓ヲ彼ニ與ヘテ、彼ノ開明ノ資トナサシメヌ、獨立黨ハ是ニ勢ヲ得テ、我が明治十七年ニハ、

事大黨ヲ滅セント企テヌ、其時、我が公使竹添進一郎ハ、國王ノ依頼ヲ受ケテ、宮門ヲ守リシニ、清國公使袁世凱、亂民ヲ煽動シテ、之ヲ襲ハシム、礮林大尉以下三十九人之ニ死ス、是ニ於テカ我政府ハ、外務卿井上馨ヲ朝鮮ニ派遣シテ償金十二萬圓ヲ出サセ、且宮内卿伊藤博文ヲ清國ニ派遣シテ、彼國ノ大臣李鴻章ト會議セシメ、其結果トシテ、互ニ朝鮮ニアル屯兵ヲ撤シ、若シ朝鮮ニ兵ヲ出スコトアラントキハ、先ツ互ニ相通知スベキコト、ナレリ、是ヲ天津條約ト云フ、然ルニ明治廿七年ニ至リ、朝鮮東學黨ノ亂起リケレバ、清國政府ハ、カヲ朝鮮ニ借スヲ名トシテ、天津條約ニ背キテ出兵セリ、我政府爭テカ默スベキ、乃チ急ニ軍艦ヲ遣リ、清兵ニ先チテ京城ニ入り、互ニカヲ協セテ、朝鮮ヲ扶植セント交渉セシニ、彼違依シテ應セズ、遂ニ茲ニ戰端ヲ開クニ至レリ、是

ヲ征清ノ役ト云フ、後和成リ、清國政府ハ、朝鮮ニ容喙セザルコト、ナリケレバ、我政府ハ朝鮮ニ勸告シテ、政府ノ改善、制度ノ革新ヲ測ラシム、後明治二十九年朝鮮國王ハ、露國ノ公使館ニ入りテ、事大黨ヲ登用シ、獨立黨ノ大臣等ヲ慘殺シタリキ、是ニ於テカ我ガ厚意殆ト水泡ニ歸セリ、嗚呼マタ嘆ズベキカナ。

(三六) 立憲政完成ノ次第ヲ記スベシ

我國ヲシテ立憲國タラシメンコトハ、今上天皇ノ御素志ニシテ、明治ノ初年ニ於テ、既ニ五ヶ條ノ御誓文アラセラレシガ、同二年ニハ集議院ヲ京都ニ開キテ、各藩ノ公議人ヲ召シテ、政務ヲ議セシメ給ヒ、明治八年ニハ、立法ノ基ヲ定メ、司法ノ權ヲ固メンタメニ元老院ト大審院トヲ設ケラレ、又地方官會議ヲ開カセラル、尋

テ明治十二年ニハ、府縣會ヲ開カシメラレ、十四年ニハ明治二十三年ヲ期シテ、國會ヲ開カセラレントゾ、宣ハセ給ハル、カクテ憲法取調ノ爲メ、伊藤博文ヲ派シテ、歐洲各國ノ政體ヲ視察セシメ給ヒ、十八年大ヒニ官制ヲ改革シテ、着々準備ヲ進メ、明治二十二年二月十一日、乃チ紀元節ノ佳辰ヲトシテ、大日本帝國憲法及ビ皇室典範ヲ發布シ給フ、時ニ親王、大臣、勅奏任官、府縣知事、裁判所長、府縣會議長等、皆此ノ式ニ召サセラレ、外國公使モマタ參列セリ、實ニ千古未曾有ノ大典ナレバ、上下ノ歡聲湧クガ如ク、都鄙頗ル賑ハヘリ、カクテ明治二十三年ニ至リ曾テ豫記セル如ク、議員ヲ召集シテ帝國議會ヲ開カセラル、サテ議會ハ貴族院ト衆議院ノ二ツヨリ成リ、貴族院議員ハ、皇族、有爵者、及ビ國家ニ勤勞アリシ者、學識ノ勝レタル者、多額ノ國稅ヲ納ムル

者ヲ以テ組織セラレ、衆議院議員ハ各府縣ヨリ選出セル者ヲ以テ組織セラル、是ニ於テカ、我等臣民ハ、畏クモ天皇ノ大政ニ、參與シ奉ルコト、ハナレリ。

(三九) 立太子式ト銀婚式トノ次第ヲ記セ

明治二十二年、乃チ憲法ノ發布アラセラレタル年ノ天長節ノ御祝日ヲ以テ、皇子嘉仁親王ヲ皇太子ニ立テサセラレ、壺切劔ヲ傳ヘサセ給ハル、尋キテ二十五年銀婚式ノ嘉儀ヲ舉サセラレケルガ、士民ノ奉祝、滿都撼カンバカリノ盛況ナリキ。

(四〇) 征清ノ役ヲ記スベシ

(原因)(二二六問ヲ參照スベシ)

(事實)陸軍ハ牙山、成歡ノ清兵ヲ走ラシメ、更ニ平壤ニ據レル清兵ヲ敗リ、進ンテ、北清ニ入り、將サニ北京ヲ衝カントセリ、海軍ハ、豊島海ニ於テ清艦ヲ捕獲シ、更ニ黄海ニ於テ、彼ガ以テ頼ミトセル處ノ、北洋艦隊ノ全勢力ヲ失ハシムルノ、大勝利ヲ博シタリ、是レ陸軍ガ平壤ヲ取りタル翌々日ナリキ。

此時天皇陛下ハ、大本營ヲ安藝ノ廣島ニ進メ給ヒケレバ、國民ノ敵愾心益盛ニシテ、帝國議會ハ立トコロニ、二億五千萬圓ノ軍費支出ヲ協賛シ、少壯者ハ身ヲ擢ンシテ從軍センコトヲ請ヒ、老幼ハ産ヲ傾ケテ軍資ヲ獻セリ、我陸海軍人ハ茲ニ更ニ力ヲ得テ、向フ所、克タザルハナク、攻ムル所、破ラザルハナク、遂ニ旅順口、威海衛ノ二大關門ヲ取ルニ至レリ。

(結果)清國力屈シ、和ヲ我ニ請ヒケレバ、彼ノ遼東半島、及ビ臺

灣島ヲ我ニ出サシメ、且ツ償金二億兩ヲ納ルコト、ナリテ局ヲ結
ベリ、爾來我國威四方ニ揚レリ。

(三三) 征清ノ役ノ影響如何

清國土地ヲ納レ、償金ヲ出シテ、和ヲ我ニ請フヤ、露、獨、佛ノ
三國ハ我ノ遼東半島ヲ有スルハ、東洋平和ノ策ニアラズトノ、忠
言アリケレバ、我が皇帝之ヲ納レサセラレテ、半島ヲ清國ニ還附
シ、更ニ償金トシテ三千萬兩ヲ我ニ納レシメ、茲ニ二國ノ交誼、
舊ニ復スルコト、ナレリ、而シテ此戰爭ノ影響トシテ、從來難題
タリシ、條約改正ハ着々トシテ歩ヲ進メ、英、米、獨、埃ノ諸強
國皆我が提議ヲ承諾シタリ。

(三三) 征露ノ役ヲ記スベシ

曩ニ日清戰役後、露、獨、佛ノ三國ハ聯合シテ干涉ヲ試ミ、日本
ヲシテ其ノ占領セル遼東半島ヲ、清國ニ還附セシムルニ至リシカ
バ、我が國民ハ、舉テ其ノ橫暴ニ憤激シ、他日必ズ、之ニ一矢ヲ
酬ヒンコトヲ期シ、銳意戰後ノ恢復ト國力ノ充實ニ力メタリキ、然
ルニ露、獨、佛ノ三國ハ、爾來極東ノ經營ニ着々成功シ、殊ニ露
國ノ如キハ頗ル暴狀ヲ極メ、浦鹽斯德港ヲ築キテ、極東ノ海軍根
據地ヲ開キ、シベリヤ鐵道ノ完成シテ滿州ニ兵ヲ送り、盛ンニ軍
事的行動ヲ逞シクシ、殊ニ明治三十三年北清事變後ハ、鐵道保護
ヲ名トシテ其ノ兵ヲ撤セズ、却ツテ兵ヲ進メテ朝鮮ヲモ壓服セン
トスルニ至リシカバ、東洋ノ平和ヲ以テ其任トセル、我帝國ハ之

ニ對シテ、極力抗爭セシモ、露國ハ頑トシテ之ニ應ゼズ、却ツテアレキシーフヲ總督トシテ、滿韓ノ本和ヲ攪亂シ、延キテ我が帝國ノ獨立ヲ危クセントスルニ至リシヲ以テ、我國ハ烈シク之ニ抗議ヲ試ムルト共ニ、一方英國ノ攻守同盟ヲ結ビ、一方露國駐劄全權大使栗野慎一郎ヲシテ、露國政府ト交渉セシモ、露國ハ尙ホ之ヲ肯ンゼザルヲ以テ、茲ニ兩國ノ國交斷絶シ、我國ハ明治三十七年二月ヲ以テ、露國ニ對シ宣戰ヲ布告セリ。

(戰況)開戰以來我軍ハ連戰連勝シ、大ニ列國ノ耳目ヲ聳動シ、三十八年二月、我が陸軍ハ、奉天附近ニ露軍ヲ擊退シテ大勝ヲ博シ、五月二十七、八ノ兩日我が海軍ハ、日本海々戰ニ於テ、バルチック艦隊ヲ全滅シタリ。

(講和) 此ノ海陸ノ大戰ニヨリ、露軍ハ全ク絶滅シタレバ、アメ

リカ大統領ルーズベルト氏ノ提議ニヨリ、日露兩國ハ、米國ポーツマウスニ和ヲ講シ、我ハ樺太南部ト、朝鮮ノ保護權ヲ得テ、茲ニ始メテ平和ノ成立ヲ見ルニ至レリ。

(三三三) 征露ノ役ノ影響如何

前述ノ如ク、日露ノ戰役ハ、全ク我が軍ノ大勝ニ歸シ、其ノ結果ハ、露國ノ極東經營ニ致命傷ヲ與ヘ、彼レヲシテ再び起ツ能ハザラシメヌ、之ニ反シテ我が國ハ旭日昇天ノ勢ヲ以テ、列強ト比肩シ、東洋平和ノ責任ハ、一ニ我國ニ懸リテ、其行動ハ世界ノ外交上ニ、至大ノ影響ヲ及ボスニ至レリ、サレバ我國民タルモノハ、奮勵努力進ンデ、東西文化ノ融合ヲ謀リ、萬國無比ノ國光ヲ發揚スル事ヲ勉メザル可カラズ。

(三言) 内地雜居ノ事ヲ記スベシ

條約改正ノ結果トシテ明治三十二年七月ヲ以テ外人ノ内地ニ雜居スルコトヲ許サレ、同時ニ彼等外人ノ我國ニ居住スルモノ、皆我法律ノ下ニ支配セラル、コト、ナレリ、嗚呼我親聖ナル皇帝陛下ハ、一視同仁、マタ彼等外人ヲシテ、子來セシムルニ至ル、偉ナルカナ。



第四編 通 史
第十三章 國 體

(三言) 我國ニ於ケル皇室ト臣民トノ關係ヲ述フベシ

天孫ノ降臨シ給ヒシヨリ後、神武天皇ニ至リテ、國內全ク統一シ、萬世一系ノ皇孫ノ、代々此國ニ君臨シ給フハ、今更言ヲ待タサル所ナルガ、我カ國民モ、マタ多クハ、皇室ヨリ分離シタルモノニシテ、其原始ヲ同シクセリ、タ、僅カニ三韓其他ノ歸化人、ナキニアラザルモ、歷代ノ天皇マタ之ヲ愛撫シ給ヒケレバ、人民ノ皇室ヲ思フコト宗家ノ如ク、皇室ノ人民ヲ視給フコト、支族ノ如ク、其關係スルトコロ恰モ父子ノ如シ、サレハ諸外國ニ於ケルノ君民

トハ、大ニ其趣ヲ異ニセリ、是レ我邦ノ以テ諸外國ニ誇ルトコロナリ。

(三三) 神武天皇ヨリ今上天皇ニイタルマデノ皇位ノ繼承ヲ記スベシ

神武天皇ヨリ、今上天皇マテ百二十一代、父子繼承ヲ以テ數フレハ六十八世ナリトス。

(三三) 我邦ニ於ケル人種如何

現今ノ種族ハ、大和民族、蝦夷種族、琉球人種、臺灣人種ノ四種ニ區別シ得ベシ、古代ニ溯リテ、之ヲ舉クレバ、大和民族ノ外ニ、土蜘蛛族、蝦夷種族、及熊襲種族等アリキ。

(三三) 我邦古代ヨリノ政體ト實權ノ所在トヲ問フ

我國ハ建國以來、君主專制ノ政體ニシテ、一系ノ皇統ヨク臣民ヲ愛撫シ來リシガ、明治二十二年憲法ヲ發布セラレ、二十三年帝國議會ヲ開カセラレテ、茲ニ立憲君主政體ノ國トナレリ、サテ建國以來ニ於テ、實權ノ所在ヲ忌ミ憚ルトコロナク舉クルトキハ、曰ク皇室曰ク、相家、曰ク武門ノ三ツトナルベシ、而シテ皇室ニ於テハ、天皇親ラ政ヲ執ラセラル、ハ、勿論ナレドモ、時ニ或ハ上皇、法皇等ノ實權ヲ執ラレシコトアリキ、相家ニ於テハ、大臣トナリ、或ハ攝政關白トナリテ、實權ヲ握リシコトアリ、或ハ外戚タルノ故ヲ以テ、勢威一世ヲ歷シタルモノモアリキ、武家ハ主ニ將軍ト呼ビ、或ハ執權ト呼ビ以テ大政ヲ掌ニシタリキ、然レモコレハ源賴

朝府ヲ鎌倉ニ開キテヨリ、徳川慶喜ノ政權ヲ返上シタルノ間ノミナリ。

第十四章 國家ノ發達

(三九) 境土擴張ノ狀況如何

天孫降臨シテ、西國ニ在スヤ、東方未タ王化ニ霑ハス、神武天皇東征シテ、皇位ニ大和ニ即カセラル、モ、其ヨク服屬セルモノハ、中國ノミ、崇神天皇四道將軍ヲ置カセラレテ、益々天業ヲ恢弘シ、神功皇后三韓ヲ征シテ、コレヲ内附セシメシハ、國土ヲ擴ムルノ最大ナルノ時トナス、爾來叛服常ナキヲ以テ、コレヲ棄テタリト云フト雖モ、我國マタ文弱ニ流レテ、武威ノ振ハザルニヨラズンハアラズ、爾來千有餘年我今上陛下ニ至リテ、蝦夷ヲ北海道ト命

名シテ、十一國トナシ、樺太ヲ以テ千島ト交換シ、琉球全島ヲ我内藩トナセリ、二十七八年ノ征清ノ役ニハ其結果トシテ、臺灣島ヲ我ニ納レシメ、尋デ明治三十三年北清事變起ルヤ、我が軍亦出征シテ、ノ雄武ハ列國ノ認ムル所トナリ、三十五年ニハ英國ト攻守同盟ヲ結ビテ、國威益揚リ、遂ニ三十七八年征露ノ役ニ於テハ海ニ陸ニ連戰連勝シテ、曠古ノ大勝ヲ博シ、曩ニ露國ト交換セシ樺太南部ヲ再ビ我が國ニ割讓セシメ、朝鮮ヲ純然タル保護國トナシ、並ニ滿州ノ租借權ヲ得テ光榮アル戰果ヲ收メ、近ク明治四十三年ニハ朝鮮ヲ合併シテ、帝國ノ一部トナシ、爾來國運益々發展シ、蕞爾タル極東ノ島帝國モ、今ヤ一躍シテ世界列強ノ伍伴ニ列シ、東洋平和ノ盟主タルニ至レリ、豈快ナラズヤ。

(三四) 文學發達ノ狀況如何

我國ニ於テ、文學ナルニ字ヲ以テ、命名シ得ルニ至レルハ、應神天皇ノ御代以降ナリ、タ、和歌ノミハ、神代ヨリ既ニ行ハレ、神武天皇以下ノ列聖モ、マタ屢、コレヲ詠セラレタリ、降リテ唐ト通スルニ及ビテ、彼ノ文學ハ、一瀉千里ノ勢ヲ以テ、我ニ流入シ、制芟、工藝ト共ニ盛ナルニ至レリ、始メテ學校ヲ建テ、大學寮ヲ置キ、國史ノ撰アリシモ、皆此時ノコトナリ、和文モマタ共ニ盛ニ起リテ、記貫之、藤原定家等ノ名士輩出シテ、和歌ノ法則、マタ明ナルニ至レリ、然レトモ此等文學ノ盛ナルノ結果トシテ、文弱ノ弊ニ陥リ、武人跋扈ノ時代ト化シ去リケレバ、跋扈ノ益、甚シキニ從ヒテ、文學ハ彌、衰微シ、三四百年ノ間、闕トシテ聲ヲ

收メキ、徳川家康天下ヲ平ケ、政柄ヲ握ルニ及ビ、和學漢學共ニ起リ、漢學ニハ林家ヲ始メトシテ、伊藤仁齋、荻生徂徠、佐藤一齋、賴山陽等ノ大儒輩出シ、和學ニハ、僧契沖、古代ノ言語、文章ヲ研突シテヨリ、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤等相尋キテ起リ、大ニ此派ノ文學ヲ唱ヘタリ、此時代ニ西洋ノ文學モマタ漸ク入り來レリ、乃チ新井白石博學強記ノ資ヲ以テ、西洋ノ事情ヲ問ヒ究メシヲ始メトシテ、幕府ノ儒官、青木昆陽大ニ蘭學ヲ唱ヘ、蘭書ヲ講習シケレバ、學風マタコ、ニ一潮流ヲ生シ、醫家、天文家、砲術家、等皆蘭書ヲ讀ムニ至レリ、而シテ米艦我國ニ渡來シテヨリハ、此潮流ノ勢ヲ得、維新ノ大業ノ成リシ後ハ、和漢二流ノ學潮ヲ歴シ、或ハ海外ニ航シテ學ブモノアリ、或ハ學校ヲ建テ、外人ヲ聘シテ習フモノアリ、以テ今日ノ盛況ニ至レリ。

增補
改訂
日本歴史問答 畢

(一) 表覽一歷事本日本

代數	御諡號	御即位年(紀元)	年	號	重要ナル事蹟
一	神武	一			御東征 橿原宮御即位
二	綏靖	八〇			
三	安寧	一三三			
四	懿德	一五二			
五	孝昭	一八六			
六	孝安	二六九			
七	孝靈	三七二			
八	孝元	四七七			

大日本事歷一覽表

(二) 大日本事歴一覽表

九	開化	五四	
一〇	崇神	五四	四道將軍ヲ置ク 天照大神ヲ伊勢ニ祭ル
一一	垂仁	六三	倭穗彥叛ス 殉死ヲ禁ス
一二	景行	七二	熊襲ヲ親征セララル 日本武尊熊襲及蝦夷ヲ征ス
一三	成務	七二	武内宿禰ヲ大臣トナス
一四	仲哀	八五	熊襲ヲ親征セララル
一五	應仁	九〇	三韓ヲ征ス
一六	仁德	九三	漢學傳來ス 課役ヲ免セララル
一七	履中	一〇〇	史官ヲ置ク

(三) 大日本事歴一覽表

一八	反正	一〇六	
一九	允恭	一〇七	姓氏ヲ定ム
二〇	安康	一一四	眉輪王ノ弑逆
二一	雄略	一二七	桑ヲ諸國ニ植エシム
二二	清寧	一四〇	
二三	顯宗	一四五	
二四	仁賢	一四八	
二五	武烈	一五九	
二六	繼體	一六七	
二七	安閑	一八四	

(五) 表覽一歷事本日大

四 天智	三 弘文	四 天武	四 持統	四 文武	四 元明	四 元正	四 聖武	四 孝謙
一三六	一三三	一三三	一三五	一三七	一三六	一三五	一三四	一四九
		朱鳥	朱鳥	大寶、慶雲	和銅、養老	靈龜、養老	神龜、天平、天平勝寶、	天平勝寶、天平寶字
藤原鎌足薨ズ	壬申ノ亂			大寶令成ル	古事記成ル都ヲ奈良ニ遷ス	日本記成ル	吉備眞備歸朝ス藤原廣嗣叛ス奈良ノ大佛成ル	惠美押勝叛ス

(四) 表覽一歷事本日大

三 宣化	二 欽明	三 敏達	三 用明	三 崇峻	三 推古	三 舒明	三 皇極	三 孝德	三 齊明
二六	一〇〇	一一三	二四六	二四	二五二	二八九	三〇一	三〇五	三二五
								大化、白雉	
	百濟佛像及經論ヲ獻ズ		物部氏亡ブ	蘇我氏ノ大逆	厩戸皇子憲法ヲ撰ス始メテ隋國ニ通信ス		蘇我氏亡ブ	大化ノ新政	阿倍比羅夫蝦夷ヲ伐ツ

(六) 大日本事一覽表

四	淳仁	一四九	天平寶字	
四	稱德	一四五	天平神護 神護景雲	和氣清麻呂流サル
四	光仁	一四〇	寶龜、天應	僧道鏡ヲ流ス
五	桓武	一四三	延暦	坂上田村麿蝦夷ヲ平ラク 都ヲ山城ノ平安ニ遷ス 僧最澄延暦寺ヲ建ツ
五	平城	一四六	大同	
五	嵯峨	一四七	弘仁	僧空海高野山ヲ開ク 藥子ノ亂
五	淳和	一四四	天長	
五	仁明	一四四	承和、嘉祥	橘逸勢流サル
五	文德	一五二	仁壽、齊衡、 天安	藤原氏太政大臣トナル

(七) 大日本事一覽表

五	清和	一五九	貞觀	藤原良房攝政トナル
五	陽成	一五七	元慶	
五	光孝	一五五	仁和	
五	宇多	一五八	仁和、寬平	藤原基經關白トナル 寬平ノ御遺誠ヲ作ラル
六	醍醐	一五六	昌泰、延喜、 延長	菅原道實大宰府ニ遷サル 延喜ノ治
六	朱雀	一五二	承平、天慶	天慶ノ亂
六	村上	一六七	天曆、天德、 應和、康保	天曆ノ治
六	冷泉	一六六	安和	
六	圓融	一六〇	天祿、天延、 貞元、天元、 永觀	

表覽一歷事本日大 (八)

壹 花山	壹 一條	壹 三條	壹 後一條	壹 後朱雀	壹 後冷泉	壹 後三條	壹 白河
一六五	一六四	一六三	一六七	一六七	一七〇	一七九	一七三
寬和	永延、永祚、 正曆、長德、 長保、寬弘	長和	寬仁、治安、 萬壽、長元	長曆、長久、 寬德	永承、天喜、 康平、治曆	延久	延久、承保、 承曆、永保、 應德
	藤原道長ノ專横		平忠常叛ス		前九年ノ役	藤原氏屏息ス	院宣政治始マル

表覽一歷事本日大 (九)

壹 堀河	壹 鳥羽	壹 崇德	壹 近衛	壹 後白河
一七五	一七六	一七四	一八三	一八六
寬治、嘉保、 永長、承德、 康和、長治、 嘉承	天仁、天永、 永久、元永、 保安	天治、大治、 天承、長承、 保延、永治	康治、天養、 久安、仁平、 久壽	保元
後三年ノ役				保元ノ亂

(一一) 表覽一歷事本日大

八九	八八	八七	八六	八五	八四
後深草	後嵯峨	四條	後白河	仲恭	順德
一九〇七	一九〇三	一八九三	一八八二	一八三二	一八七一
正康寶實治、建長、 元元、正嘉	寬元	延嘉天 應應禎福、 仁治、仁、 文曆	貞嘉貞、 應祿、安、 元仁、 貞永	承久	建曆、建保、 承久
僧親尊親王、 賴嗣ニツギテ 將軍トナル 一向宗ヲ唱フ	藤原賴嗣、 賴經ニツギテ 將軍トナル 北條時賴執權ス		北條泰時執權ス 貞永式目成ル		實朝殺サレ源氏ノ 正統絶ユ 北條氏藤原賴經ノ 以テ將軍トナス 承久ノ亂

表覽一歷事本日大 (〇一)

八三	八二	八一	八〇	七九	七八
土御門	後鳥羽	安徳	高倉	六條	二條
一八五九	一八四六	一八四二	一八三九	一八三六	一八二九
正治、建仁、 元久、建永、 承元	建久	元曆、文治、 養和、壽永	嘉應、承安、 安元、治承	仁安	平治、永曆、 應保、長寬、 永萬
源賴家將軍トナリ尋テ實朝將軍トナル	源賴朝府ヲ鎌倉ニ開キ征夷將軍ニ任セラル	平氏亡ブ	源賴政以仁王ヲ奉シテ兵ヲ起ス 源賴朝木曾義仲起ル	平清盛太政大臣トナル	平治ノ亂

(三一) 表覽一歴事本日大

院	明	持	九	九	九
崇	光	光	後	後	後
光	明	嚴	龜	村上	醍
二〇〇九	一九九六	一九九三	二〇〇〇	一九九九	一九七九
貞和、觀應、	建武、曆應、 康永、貞和、	正慶	天授、弘和、 天中、	興國、正平、	元應、元亨、 正中、嘉曆、 元德、元弘、 建武、延元、
	足利尊氏將軍トナル		南北和議成ル	正行戰死ス 武藏野ノ戰爭及筑後河ノ戰爭	天皇笠置ニ幸セラレ、尋テ隱岐ニ 遷サレ給フ 北條氏亡ビ中興ノ業成ル 尊氏叛シ、護良親王弑セラ 天皇吉野ニ幸セラ 正成戰死シ尋テ義貞、顯家等マ 死ス

表覽一歴事本日大 (二一)

九	九	九	九	九	九
龜	後	後	伏	後	龜
山	二	二	見	宇	山
一九二〇	一九六二	一九五九	一九八	一九五五	一九二〇
文應、弘長、 文永、	乾元、嘉元、 德治、	正安、	正應、永仁、	建治、弘安、	文應、弘長、 文永、
惟康親王、宗尊親王ニツギテ將軍 トナル 北條時宗執權ス 僧日蓮、日蓮宗ヲ唱フ 蒙古始メテ入寇ス	北條貞時、後深草龜山ニ流交立ノ 議ヲ建ツ		久明親王、惟康親王ニツギテ將軍 トナル	弘安ノ役	

一〇〇	九	朝	ノ	流
稱光	後小松	後小松	後圓融	後光嚴
二〇七	二〇五	二〇四	二〇三	二〇二
應永、正長、	明德、應永、	嘉慶、至德、 明德、康應、	應安、永和、 康曆、永德	文和、延文、 應和、貞治、 應安
義量、義持ニツギテ將軍トナル	義滿ノ驕僭 義滿明ニ通ズ 金閣成ル 義海薨シテ義持將トナル	南北和議成ル	足利義滿義詮ニツギテ將軍トナル	足利義詮尊氏ニツギテ將軍トナル

一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一
正親町	後奈良	後柏原	後土御門	後花園
三三七	三二六	三二〇	三二五	三〇八
永祿、元龜、 天正、	大永、享祿、 天文、弘治、	文龜、永正、 永、	應永、文正、 長享、延德、 別應、	永享、嘉吉、 又安、寶徳、 享祿、康正、 長祿、寛正、
小牧山ノ戦ヲ行フ 明智光秀弒逆ヲ行フ 織田信長上洛ス 足利氏遂ニ亡ブ 義輝ニツギテ義昭將軍トナリシガ	北條氏康、 鐵砲ヲ傳フ 上杉氏ヲ追フ 義輝ニツギテ義昭將軍トナル	北條早雲東國ニ起ル 義晴ニツギテ義輝將軍トナル	應仁ノ亂 義政ニツギテ義尙、義植、義澄、 將軍トナル	義教義勝義政相尋キテ將軍トナル 嘉吉ノ變 關東亂ル

二〇〇	九	朝	流
稱光	後小松	後小松	後光嚴
二〇三	二〇五	二〇四	二〇三
應永、正長、	明德、應永、	嘉慶、永德、 康應、	應安、永和、 康曆、永德
義量、義持ニツギテ將軍トナル	義滿ノ驕僭 義満明ニ通ズ 金閣成ル 義隆薨シテ義持將トナル	南北和議成ル	足利義詮曾氏ニツギテ將軍トナル

二〇二	二〇三	二〇四	二〇五
後花園	後土御門	後奈良	正親町
二〇八	二二五	二二六	二二七
永享、嘉吉、 又安、寶徳、 享徳、寛正、 長祿、寛正、	寛正、文正、 應仁、文明、 應享、延徳、 別應	大永、享祿、 天文、弘治、	永祿、元龜、 天正、
義致義勝義政相尋キテ將軍トナル 嘉吉ノ變 關東亂ル	應仁ノ亂 義政ニツギテ義尙、義植、義澄、 將軍トナル	義晴ニツギテ義輝將軍トナル 義隆ニツギテ義昭將軍トナリシガ 北條早雲東國ニ起ル 義隆ニツギテ義輝將軍トナル 義隆ノ戦 北條氏康、杉氏ヲ追フ	足利氏遂ニ亡ス 織田信長上洛ス 明智光秀弑逆ヲ行フ 小牧山ノ戦争 豊臣關白トナル

表覽一歷事本日大 (六一)

一〇六	後陽成	三〇六	天正、文祿、慶長、	秀吉九州ヲ定ム、秀吉北條氏ヲ滅ホス、關ヶ原ノ戰、家康將軍トナル、山田長政暹羅ニ入ル、家康林道春ヲ召シテ學ヲ講セシム、角倉了意大堰河ヲ浚フ
一〇七	後水尾	三〇七	慶長、元和、寛永、	秀忠、家光相ツギテ將軍トナル、豊臣氏亡ブ
一〇八	明正	三〇八	寛永、	島原ノ亂
一〇九	後光明	三〇九	承保、慶安、承應、	由井正雪亂ヲ起サントス、家光ニツギテ家綱將軍トナル
一一〇	後西院	三一〇	明曆、萬治、寛文、	
一一一	靈元	三一三	寛文、延寶、天和、貞享、	綱吉、家綱ニツギテ將軍トナル、網吉、聖廟ヲ湯島ニ建ツ、伊達氏ノ内訌、

表覽一歷事本日大 (七一)

一一三	東山	二四七	元祿、寶永、	家宣、綱吉ニツギテ將軍トナル、赤穂義士ノ復讐、徳川光圀薨ズ、家宣新井白石ヲ登庸ス
一一四	中御門	二五〇	寶永、正徳、享保、	家宣ニツギテ家繼、吉宗、將軍トナル
一一五	櫻町	二五九	元文、寛保、延享、	家重、吉宗ニツギテ將軍トナル
一一六	桃園	二六〇	寛永、寶曆、	家治、家重ニツギテ將軍トナル
一一七	後櫻町	二六三	寶曆、明和、	
一一八	後桃園	二六四	明和、安永、	
一一九	光格	二六八	安永、天明、寛政、享和、文化、	家齊、家治ニツギテ將軍トナル、天明ノ飢饉、本居宣長、塙保巳一卒ス、魯西亞人蝦夷ニ來ル
一二〇	仁孝	二七七	文政、天保、弘化、	家慶、家齊ニツギテ將軍トナル、頼山陽卒ス

御謚ノ肩ニ●ヲ記セルハ女帝ナリ	三	三〇
	今上	孝明
	二五七 明治	二五〇七
北條氏	足利氏	織田氏
征清ノ役	帝國ノ開設	憲法ノ布
朝鮮ノ變	西法ノ戰	藩籍ノ還
太政官ノ上	藩籍ノ還	太政官ノ上
長州征伐	水戸藩ノ内訌	五條ノ生野ノ亂
坂下ノ變	櫻田ノ變	米艦渡來
弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應	家定、家茂、慶喜、相ツギテ將軍	トナル
征露ノ役	日韓合邦	

幕府略表

代	將軍	鎌倉將軍	室町將軍	織田氏	江戶將軍
初代	源賴朝	時政尊氏	織田信長	德川氏	家康
二代	全賴家	義時義詮	豐臣秀吉	秀忠	秀忠
三代	全實朝	泰時義滿	此二氏ハ初代ト算スベキニアラザレドモ序次ニ順ヒ暫ク茲ニ記入ス	家光	家光
四代	藤原賴經	時氏義持		家綱	家綱
五代	全賴嗣	經時義量		綱吉	綱吉
六代	宗尊親王	時賴義教		家宣	家宣
七代	惟康親王	時宗義勝		家繼	家繼

表 幕 府 幕 (〇二)

八代	久明親王								
貞時	義政								吉宗
高時	義尙								家重
九代	守邦親王								家治
十代									家齊
十一代									家慶
十二代									家定
十三代									家茂
十四代									慶喜
十五代									

明治四十四年十二月廿八日印刷
 明治四十五年一月一日發行

著作者 歷史地理研究會

發行者 富田能次

印刷者 日下主計

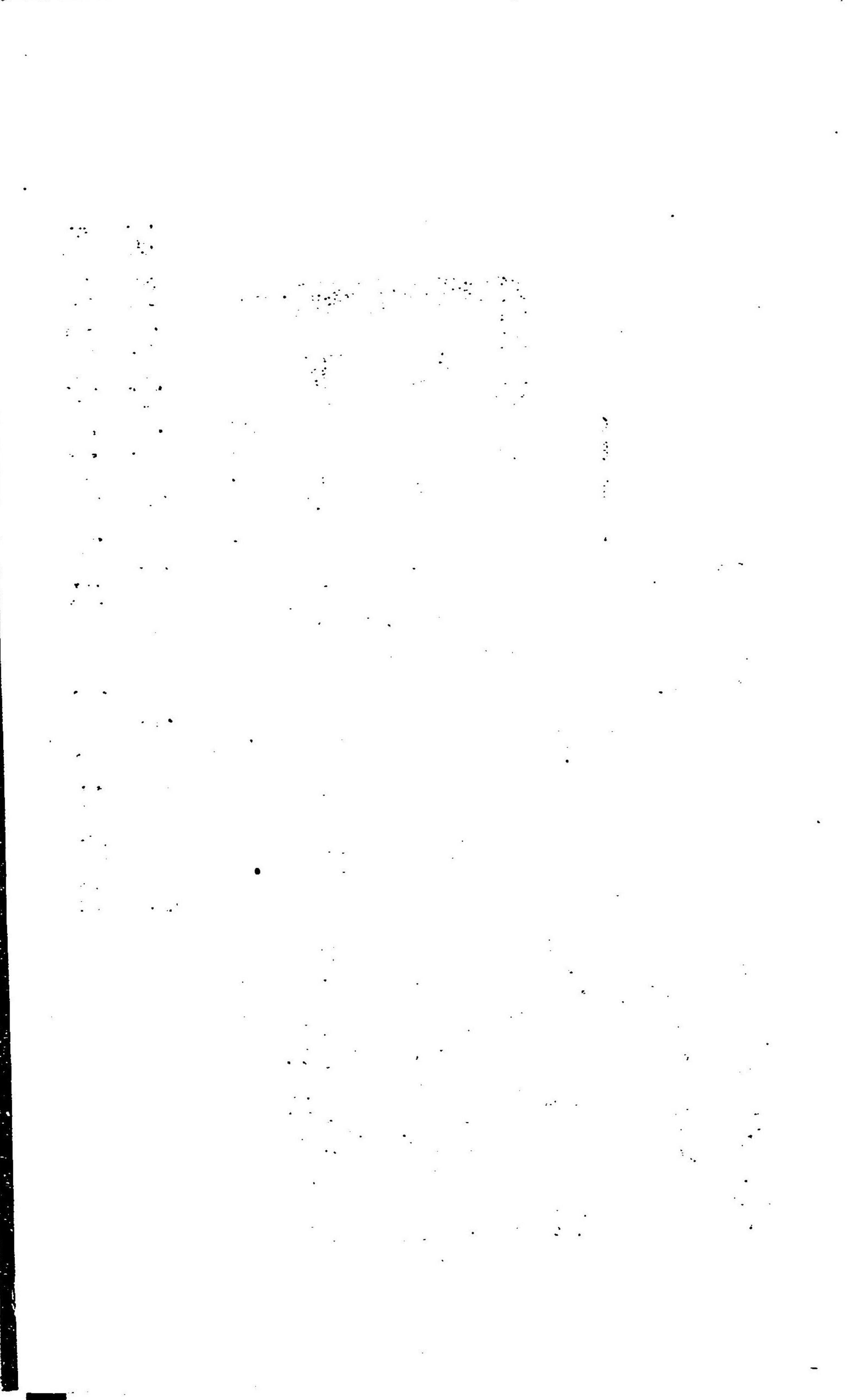
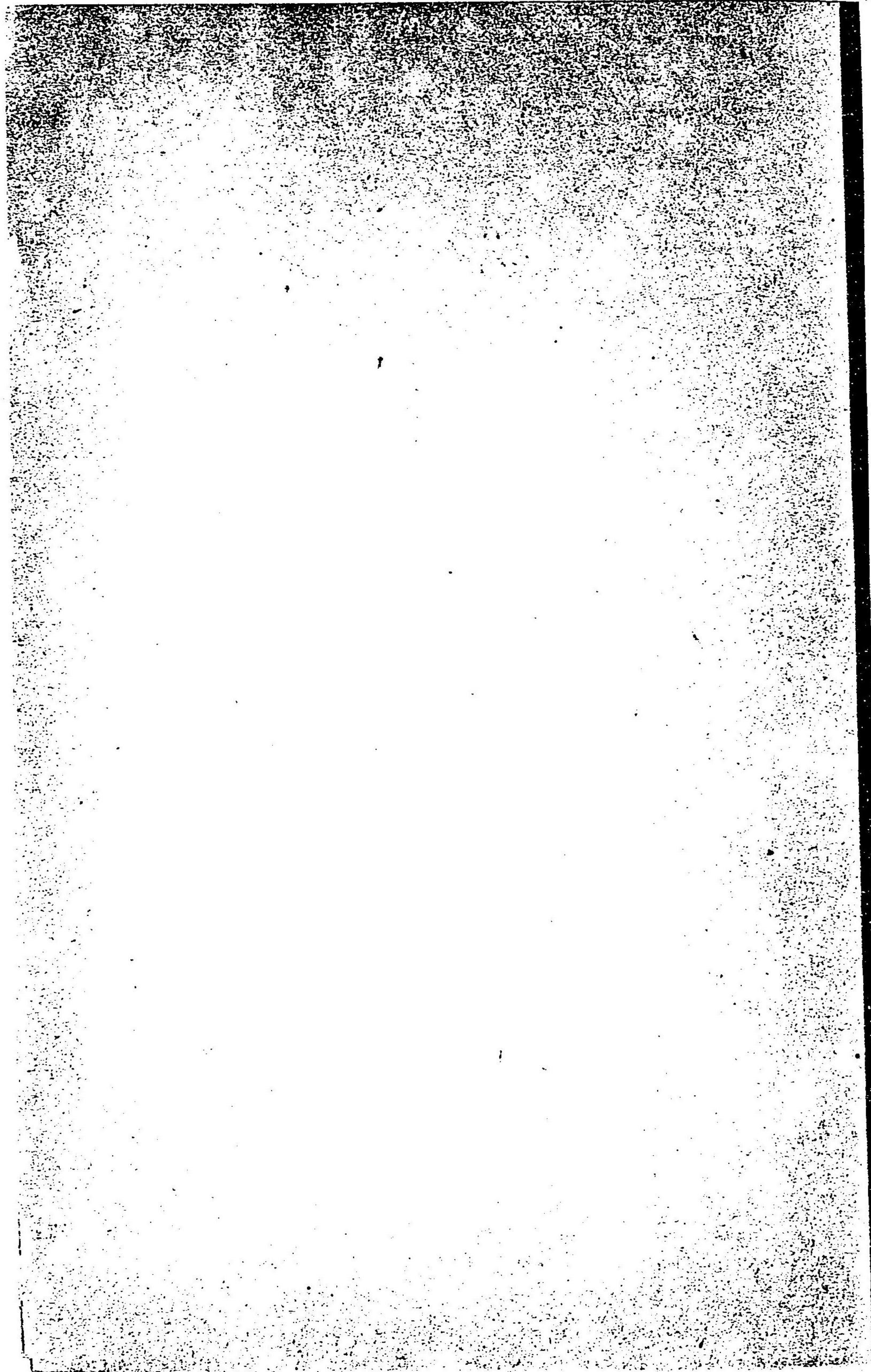
印刷所 日英舍

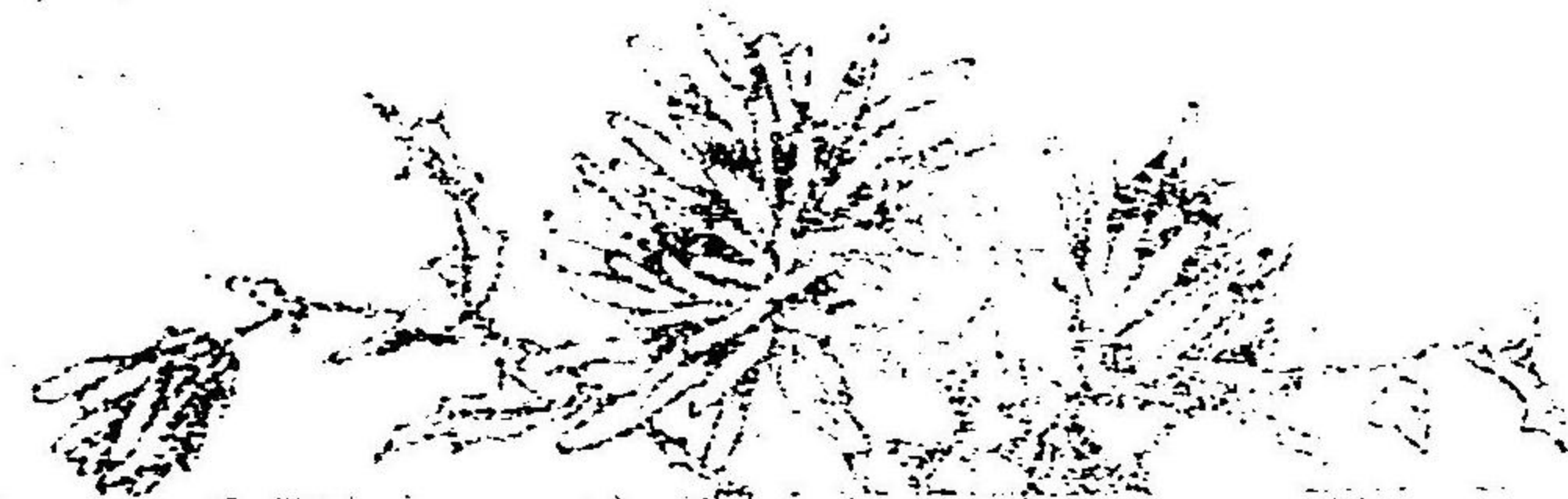


答問史歷本日

東京市神田區美土代町三丁目一番地

發行元 富田文陽堂





新撰本日歷史問答

